

督官吏指定ノ達中各追加

明治二十三年三月  
海軍省達第八十五號

本年達第二十一號仕拂命令委任諸官中「鎮守府主計部長」ノ次ニ「吳鎮守府造船部小野濱分工場先任主幹」ヲ加ヘ達第二十二號會計主務官收入官吏中「大學校主計長」ノ次ニ「吳鎮守府工費課長」ヲ加ヘ達第二十三號收入監督官吏中「鎮守府主計部長」ノ次ニ「吳鎮守府造船部小野濱分工場先任主幹」ヲ加フ

●經費仕拂命令委任官、會計主務官及收入官吏收入監督官吏ノ三達中追加

督官吏ノ三達中追加

明治二十三年三月  
海軍省達第一百十二號

本年達第二十一號委任仕拂命令官ニ「新原探炭所長」ヲ加ヘ達第二十二號會計主務官收入官吏ニ「新原探炭所會計主務」ヲ加ヘ達第二十三號收入監督官吏ニ「新原探炭所長」ヲ加フ

兵備品通常物品出納命令官武庫主管會計官吏ヲ左ノ通定メ海軍通常物品會計規程第七條ヲ刪除ス

●委任仕拂命令官、會計主務官收入官吏、收入監督官吏ノ達中改正

明治二十三年三月  
海軍省達第二百二十三號

本年達第二十一號委任仕拂命令官中及達第二十三號收入監督官吏中「吳鎮守府造船部小野濱分工場先任主幹」ヲ「吳鎮守府造船部製造科長」ト改メ達第二十二號會計主務官收入官吏中「吳鎮守府工費課長」ヲ「小野濱分工場會計主務官」ト改ム

●委任支拂命令官、會計主務官收入官吏、收入監督官吏ノ達中追加

更ノ達中追加

明治二十三年十月  
海軍省達第三百四十七號

本年達第二十一號委任仕拂命令官中「中央衛生會議議長」ヲ刪リ「軍醫學校長」「主計學校長」ヲ加ヘ達第二十二號會計主務官收入官吏ニ「軍醫學校會計主務」「主計學校主計長」ヲ加ヘ達第二十三號收入監督官吏中「中央衛生會議議長」ヲ刪リ「軍醫學校長」「主計學校長」ヲ加フ

●海軍省ニテ仕拂フヘキ軍事費臨時費々目

明治二十三年五月  
海軍省達第二百六號

本省ニ於テ仕拂ヘキ軍事費臨時費ハ左ノ如シ

- 一、參謀部、將官會議、技術會議、中央會計監督部、東京軍法會議其他直轄員等ノ俸給諸給及旅費

- 二、前項ノ諸應ニ係ル應費雜給及機密費
- 三、東京軍法會議ニ屬スル囚徒費
- 四、第二局ノ直接經營ニ係ル營繕費
- 五、第二局ノ契約ニ係ル外國ニ於テ製造スル軍艦兵器及水雷ノ諸費
- 六、大臣直轄參謀部及第一局管轄員ニ係ル海外派遣員ノ諸費
- 七、第一局所轄海外留學生費
- 八、第一局所轄依托學生費

部長局長會議々々長中央會計監督部長前任主理ハ定規アルモノ、外經費金ノ支出ヲ要スル事ヲ爲サントスル時ハ其施行若シハ契約決行前ニ第三局長ニ協議スヘシ已ニ協議濟ノモノト雖モ増費ヲ要スルトキ亦同シ

第二局ニ於テ第四第五ノ諸費支出ヲ要スル時ハ之ニ附帶スル契約書債主ノ要求書等ヲ添付シ第三局ヘ回付スヘシ

●海軍省ニテ仕拂フヘキ軍事費臨時費費目中追加

明治二十三年十月  
海軍省達第三百五十一號

本年五月達第二百六號本省ニ於テ仕拂フヘキ軍事費臨時費ノ件第一項第一費目中「技

●海軍通常物品會計規程第一條及第七條表中追加  
明治二十二年九月  
海軍省達第三百七十二號

術會議」ノ下ニ「中央衛生會議」ヲ加ヘ「東京軍法會議」ノ下ニ「中央文庫」ヲ加ヘ第二項中「前任主理」ノ下ニ「中央文庫主管」ヲ加フ

●委任仕拂命令官臨時現金前渡ヲ要スルトキ届出方  
明治二十三年三月  
海軍省達第三百十四號

委任仕拂命令官ニ於テ臨時ニ現金前渡ヲ要スルモノアルトキハ其前渡ヲ爲ス者ノ官職氏名並其前渡ヲ要スル事由ヲ詳記シ其都度届出可シ

●海軍通常物品會計規程  
明治二十二年九月  
海軍省達第三百三十五號

海軍通常物品會計規程左ノ通定ム

海軍通常物品會計規程

第一條 海軍通常物品トハ物品會計規則ニ依リ取扱フヘキモノヲ云フ其種類ハ左ノ如シ

- 一、應費ヲ以テ購買セル器具物品動物艦隊ニ屬スルモノヲ除ク
- 二、學生費ヲ以テ購買セル器具物品
- 三、囚徒費ヲ以テ購買セル器具物品

六、營業費中、作場費、  
 具物品、七、營業費  
 中、器械費、以テ購  
 買セル、器械器具物  
 品、八、營業費中、建  
 築費、以テ購買セル  
 材料物品  
 ●海軍通常物  
 品會計規程第  
 七條表中追加  
 明治二十二年  
 九月  
 海軍省達第三  
 百七十九號  
 海軍通常物品會計  
 規程第七條表中、領  
 守府ノ内ニ參謀長  
 ノ次ニ「造部部長」  
 ノ次ニ「文庫主管」  
 ノ次ニ「製造科長」  
 ノ次ニ「文庫副官」  
 ノ中ニ「次ニ」○倉  
 庫主管「ヲ加ヘ第  
 二十四條「物品出

- 四、營繕費並土木費ヲ以テ購買セル材料物品
- 五、興業費ヲ以テ購買セル器具器械材料物品
- 第二條 海軍通常物品ハ分テ備品消耗品動物ノ三種トス其類別ノ法ハ概テ第一表ニ依ル
- 第三條 備品ノ定備數豫備數、消耗品ノ年額ハ各廳長之ヲ定メ認可ヲ受クヘシ但豫備數ハ必要ナルモノニ限り之ヲ置ク其數ハ定數ノ十分ノ一ヲ以テ定限トス
- 第四條 臨時須要ノ物品ニシテ數額ヲ定メ難キモノハ豫算金額内ニテ支辨シ得ルモノニ限り各廳長便宜之ヲ購入スルヲ得
- 第五條 備品ハ各廳長ニ於テ保存期限ヲ定メ物品會計官吏ヲシテ之ヲ現品ニ明記セシムヘシ但物品ノ性質ニ依リ保存期限ヲ現品ニ明記シ難キモノハ之ヲ原簿ニ記入セシムヘシ又保存期限ヲ定メ難キモノハ其旨ヲ原簿ニ記入セシムヘシ
- 第六條 保存期限ヲ經過スルモノ尙ホ使用ニ堪フヘキ物品ハ各廳長更ニ保存期限ヲ定メ之ヲ現品又ハ原簿ニ記入セシムヘシ
- 第七條 物品出納ノ命令官及物品會計官吏ハ左ノ如シ

本	名	物品出納命令官	次等命令官	物品會計官吏
省	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
會	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
計	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
局	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
長	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
會	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
計	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
局	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長
長	會計局長	會計局長	會計局長	會計局長

納計算書ニハ、  
 下ニ當該物品出  
 納命令官ノ認定ア  
 ル「」ノ十四字ヲ加  
 フ  
 ●海軍通常物  
 品會計規程第  
 一條中改廢  
 明治二十二年  
 九月  
 海軍省達第三  
 百八十五號  
 海軍通常物品會計  
 規程第一條第五項  
 中「興業費」ヲ「作  
 業費」ト改メ第六  
 項第七項第八項ヲ  
 廢ス  
 ●海軍通常物  
 品會計規程第  
 七條表中追加  
 明治二十二年  
 十月  
 海軍省達第四  
 百五號  
 海軍通常物品會計  
 規程第七條表中、水  
 路部長ノ下ニ「圖誌  
 科長」ヲ加フ

鎮守府	參謀長	文庫主管	文庫副官
大 學 校	主計部長	主計部材料課長	倉庫主管
兵 學 校	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
中央衛生會議	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
造 兵 廠	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
火 藥 工 廠	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
水 路 部	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
小 野 濱 造 船 所	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
中 央 文 庫	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中
唐 津 石 炭 用 所	主計部長	主計部監獄課長	主計部監獄課員ノ中

物品出納命令官ハ第三條ニ據リ確定シタル物品出納ノ命令ヲ次等命令官ニ委任ス

●海軍通常物品會計規程第七條表中改正  
明治二十二年十月  
 海軍省達第四百二十四號  
 海軍通常物品會計規程第七條表中改正  
 守府ノ内造船部長ノ下次等命令官ノ欄製造科長ニテ左ノ通改正ス製造科長製造科主任(倉庫掛)  
 ●海軍通常物品會計規程第七條表中改正  
 明治二十二年十一月  
 海軍省達第四百三十九號  
 海軍通常物品會計規程第七條表中改正  
 省ノ部ヲ改正スルコト左ノ如シ  
 本省、第二局長、第二局第四課長、中、第二局第四課員ノ

ルコトヲ得但第十八條ノ物品受拂報告書ハ出納命令官之ヲ調製スヘシ  
 第八條 物品ヲ要求スル者ハ第二號甲物品要求票ニ式ノ如ク品名數量ヲ記シ捺印シテ物品出納命令官ニ請求スヘシ出納命令官要求ニ應ジテ交附スヘキモノト思考スルトキハ要求票ニ捺印シテ物品會計官吏ニ附ス物品會計官吏ハ現品ヲ支出シ第二號乙物品受領票ニ受領者ヲシテ捺印セシメ之ト引換交付スヘシ  
 第二號乙物品受領票ニ出納命令官ノ捺印アルトキハ之ヲ支出命令トス又現品ト引換ヘタルトキハ該票ヲ以テ決算證明ノ證據トシ第二號甲物品要求票ヲ以其控トス  
 第九條 物品會計官吏保管品ノ缺乏ヲ補フヲ要スルトキ又ハ支出ノ命令アル物品ヲ有セサルトキハ品名數量ヲ記シ見本品等ヲ添ヘ命令官ニ出スヘシ命令官ハ之ヲ調査シ購買ノ手續ヲ爲スヘシ  
 第十條 物品會計官吏物品ヲ受入ル、トキハ第三號物品納票ニ命令官ノ認印ヲ受ケ庫納スヘシ  
 第三號物品納票ニ出納命令官ノ捺印アルトキハ之ヲ受納ノ命令トス而シテ乙票ヲ以テ決算證明ノ證據トシ甲票ヲ以テ其控トス  
 第十一條 生産品戻入品又ハ他應ヨリ讓リ受品其他ノ物品ヲ受入ル、時ハ概テ第十條ノ手續ニヨルヘシ但物品受入ノ場合ニ於テ第三號物品納票ヲ用ヒ難キ時ハ該票

會計局長、會計局第二課長、會計局第二課員ノ中

ニ準シ納品書ヲ作り命令官ノ認印ヲ受クヘシ  
 第十二條 不用ニ屬スル物品アルトキハ取扱主任者第四號甲物品還納票ヲ作り所屬長ノ認印ヲ受ケ現品ト共ニ物品會計官吏ニ出ス可シ物品會計官吏ハ命令官ノ認印ヲ受ケ現品ヲ受領シ第四號乙領收證ヲ交付スヘシ  
 第四號甲票ハ帳記ノ證據ニ供スルモノトス  
 第十三條 不用物品ノ還納ニ際シテハ物品會計官吏ハ現品ノ毀損ナキヤ否ヤヲ検査シ毀損アル時ハ還納者ヲシテ其事由ヲ證明セシムヘシ  
 第十四條 臨時物品會計官吏ノ保管ニ屬スル物品ヲ借用セント欲スルモノハ所要ノ事由借用期限ヲ明記シタル借用書ヲ作り物品出納命令官ノ承認ヲ得現品ヲ借受クヘシ  
 貸借ノ爲メニ要スル運搬其他ノ入費ハ借受應又ハ借用人ノ支辨トス  
 第十五條 物品會計規則第十條ノ物品出納帳簿ハ第五號及第六號様式ニ依リ各廳ニ於テ之ヲ製スヘシ補助簿ハ各廳ニ於テ便宜之ヲ定ムヘシ  
 第十六條 備品ノ共用ニ係ル者ニ對シテハ各廳長其所屬員中ヨリ取扱主任ヲ命スヘシ  
 第十七條 前條ノ取扱主任ハ其取扱物品ニ對シ物品借用人ハ其借用物品ニ對シ各官吏以下ハ其使用物品ニ對シ故意怠惰ニ依リ亡失毀損シタルモノヲ辨償スルノ責ニ

任スヘシ物品ノ受領者取扱主任借用人ト別人ナルトキハ取扱主任借用人使  
用人ニ交附ノ前ニ於ケル亡失毀損ニ對シテハ受領者其辨償ノ責ニ任スヘシ

第十八條 物品出納命令官ハ第七號様式ニ依リ毎年度ノ物品受拂報告書ヲ作り翌年  
度六月二十日迄ニ會計局ニ出スヘシ

第十九條 會計局長ハ前條ノ報告書ヲ統理シテ物品會計規則第十四條ノ報告書ヲ作  
ルヘシ

第二十條 物品會計官吏ハ物品會計規則第十五條ノ計算書ヲ第八號様式ニ依リ調製  
シ證書書類ヲ添ヘ期限内ニ會計監督部ニ送付スヘシ

第二十一條 物品會計官吏交替ヲシタル時ハ前任官吏ハ第二十條ノ計算書ヲ調製  
シ證書書類ヲ添ヘ直ニ會計監督部ニ送付スヘシ

第二十二條 物品會計官吏死亡シタル時ハ臨時命スル所ノ官吏前條ノ手續ヲ爲スヘ  
シ

第二十三條 物品出納計算書中品目ノ欄ニ品目ヲ記列スルニハ第一號類別表ニ依ル  
ヘシ又其現在ノ部價格ノ欄ニハ受拂原簿ニ照シ供用品在庫品ノ總價格ヲ記入スヘ  
シ

第二十四條 物品出納計算書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ但其原書ヲ提出シ難キ場合

ニ於テハ當該官吏ノ保證アル賸本ヲ以テ之ニ代フヘシ

一、買入品戻入品生産品及保管轉換其他ノ事由ニ依リ受入トナリタル物品ニ對シ  
テハ第三號乙票若クハ之レト同一ナル證書書類又ハ之ニ代ルヘキ帳簿アルモ  
ノハ其帳簿

二、消耗品ニ對シテハ第二號乙物品受領票又ハ之レト同一ナル證書書類但物件又  
ハ人員ニ依リ數量ニ規定アルモノハ各其計算ノ基ク所ヲ詳記シタル仕譯書ヲ  
モ添付スヘシ

三、賣拂品ニ對シテハ其事由ヲ詳記シタル書類

四、亡失毀損拂ノ物品ニ對シテハ其品名數量代價及亡失毀損ニ係ル事實ヲ詳記シ  
當該物品出納命令官ノ認定アル書類又辨償ニ係ルモノハ其辨償品數量代價ノ  
仕譯書

五、生産ノ爲メ消費シタル物品ニ對シテハ其消費ノ事由ヲ摘記シタル領收證書又  
ハ之ニ代ルヘキ仕譯書

六、保管轉換ノ爲メ仕拂ノ物品ニ對シテハ當該官吏ノ領收證書

第二十五條 前條ノ證書書類ハ計算書ニ掲クル各欄ノ順次ニ依リ品目毎ニ區分編纂  
シ其表紙ニ數量ノ合計及證書ノ枚數ヲ記載スヘシ但一品目ノ證書枚數僅少ナルモ

ノハ合冊トナスモ妨ケナシ又一書類中異種ノ品目混合セルモノアルトキハ別冊ニ編纂シ其表紙ニ每品目ノ數量合計ヲ記載スヘシ

第二十六條 會計監督部ハ物品出納計算書ノ下検査ヲ執行シ其下検査書ヲ添付シテ會計検査院ニ送付スヘシ

第二十七條 前條下検査書ハ物品出納計算書毎ニ區分調製シ左ノ事項ヲ記載スヘシ  
一、物品出納計算書其他證憑書類ノ件名冊數

二、物品出納計算書ノ現在高ト其現品ト符合ヲ認メタル保證

三、計數正確ノ保證

四、法規ニ背戻シ若クハ事實ニ適合セスト認定セシ事項ノ事由

五、證憑書類中必要ノモノニシテ検査終了ノ上返付ヲ要スル書類名ノ件

第二十八條 各廳ニ於テ物品出納ノ證明ニ關シ會計検査院へ報告書又ハ答辨書等ヲ送付スルコトアルトキハ會計監督部ヲ經由スヘシ

附則

第二十九條 本規程ハ物品會計規則實施ノ日ヨリ施行ス

(第一號乃至第八號別紙略ス)

●海軍通常物品會計規程第二十條以下ヲ改正シ第八號

様式廢止

明治二十二年九月  
海軍省達第三百八十四號

海軍通常物品會計規程第二十條以下左ノ通改正シ第八號様式ヲ廢ス

第二十條 物品會計規則第十五條ノ物品出納計算書ハ物品會計官吏又ハ臨時命スル處ノ官吏ヨリ會計監督部若クハ會計監督官ニ送付スヘシ

第二十一條 物品出納計算書下検査書ノ書式及ヒ會計検査院ノ検査ニ關スル事項ハ會計検査院ニ於テ定ムル處ノ物品出納證明程式及作業費物品出納證明程式ニ依ル

第二十二條 物品出納證明程式第二條ノ類別ハ第一號類別表ニ依ルヘシ程式第三條ニ依リ朱記スル價格ハ受拂原簿ニ照シ供用品在庫品ノ總價格ヲ記入スヘシ

第二十三條 物品出納證明程式第四條第一項受入物品ニ對スル證憑書類ハ第三號乙票若クハ之レト同一ナル證憑書類又ハ之レニ代ルヘキ帳簿ヲ以テスヘシ

同條第二項消耗拂ノ物品ニ對スル領收證書ハ第二號乙物品受領票又ハ之レト同一ナル證憑書類ヲ以テスヘシ

第二十四條 各廳ニ於テ物品出納ノ證明ニ關シ會計検査院へ報告書又ハ答辨書ヲ送付スルトキハ物品出納證明程式第八條ニ依リ會計監督部ヲ經由スヘシ

附則

第二十五條 本規程ハ物品會計規則實施ノ日ヨリ施行ス

●海軍通常物品會計規程中加除改正

明治二十三年三月  
海軍省達第四百十四號

海軍通常物品會計規程中左ノ通加除改正シ本年四月一日ヨリ施行ス

第一條 海軍通常物品トハ海軍兵備品會計規則第一條ニ記載シタル物品ヲ除クノ外各種ノ物品ヲ云フ

第八條第二項中引換タルトキノ下ニ「備品ヲ供用ノ爲メ支出シタルモノ、外」ノ十七字ヲ加フ

第十三條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十三條乙 不用物品ヲ離權スルトキハ物品會計官吏第八號物品離權票ニ品名數量及其離權スヘキ事由ヲ詳記シ命令官ノ認印ヲ受ケ成規ニ從ヒ處分スヘシ

亡失シタルモノヲ決算拂ニスルニハ取扱主任者其他ヨリ第九號物品亡失報告票

ニ品名數量及其亡失シタル理由ヲ詳記シ所屬長ノ認印ヲ受ケ物品會計官吏ニ出サシメ物品會計官吏ハ命令官ノ認印ヲ受ケ記帳スヘシ

第一號海軍通常物品類別表中消耗品ノ部ニ在ル帳簿類ヲ削除シ備品ノ部ニ帳簿類

ヲ加フ

第七號報告書様式中受ノ部買入及受入ノ次ニ戻入ノ一欄ヲ加フ

第八號第九號ノ二票ヲ左ノ通追加ス(追加略ス)

●海軍通常物品會計規程中改正追加

明治二十三年十一月  
海軍省達第三百七十七號

明治二十二年九月達第三百三十五號海軍通常物品會計規程中左之通第二條第三條第十條第一號表ヲ改正シ第二十四號乙ヲ追加シ及ヒ第五條中「備品」ノ上ニ器具器械ノ四字ヲ加フ

第二條 海軍通常物品ハ器具機械備品消耗品動物ニ類別シ其類別ノ法ハ第一號甲表ニ據ル但造船材料資金ノ支辨ニ屬スル物品ハ第一號乙表ニ據リ別ニ其整理ヲ爲スモノトス

第三條 器具機械備品ノ定備數、豫備數、消耗品ノ年額ハ各廳長之ヲ定メ認可ヲ受クヘシ豫備數ハ必要ナルモノニ限り之ヲ置キ其定數十分ノ一ヲ以テ最上限トス但工場ニ於テ使用スル材料物品ハ本條ニ依ラス各廳長ニ於テ適宜其定數及豫備數ヲ定ムルコトヲ得

第十六條 工場ニ於テ使用中ノ器具機械及附屬品ハ該工場ヲ管理スル科長主幹ヲ取扱主任トス取扱主任ハ各工場長若クハ所屬員ヲシテ其責任ヲ分擔セシムヘシ  
 廳中供用ニ係ル備付品ニ對シテハ各廳長其所屬員中ヨリ取扱主任ヲ命スヘシ  
 第二十四條乙 物品會計官吏交代シ本規程第二十條ノ計算書ヲ調製シ事務引繼ヲ了シタルトキハ其時日並前任官吏氏名ヲ詳記シ命令官ヨリ其都度第三局へ通報スヘシ (第一號表略ス)

●物品購買賣却規則

明治二十三年二月 海軍省告示第五號

海軍各廳ニ對シ物品ヲ供給セントスル者及各廳ヨリ物品ヲ拂受ケントスル者ハ左ノ規則ニ從フ可シ

物品購買賣却規則

第一章 總則

第一條 鎮守府其他各廳ニ於テハ購買セントスル物品ノ標本、雛形、設計圖若クハ製造方法書ヲ定メ且之ニ番號若クハ記號ヲ附シ置クモノトス  
 物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ契約ヲ結ハントスル者ハ前項ノ標本雛形等ヲ熟覽スヘシ又供證ノ爲メ其記號若クハ番號ヲ契約書ニ記入スルコトヲ得

標本雛形等ハ各廳ニ於テ差支ナキトキニ限り請負人ノ請求ニ因リ日數ヲ限り貸與スルコトヲ得貸與中破損亡失スルトキハ該請負人其損失ヲ補償ス可シ  
 第二條 賣卻ニ付スヘキ物品ハ各廳便宜ノ場所ニ於テ拂下ノ競争ニ加ハラントスル者若クハ契約ヲ結ハントスル者ヲシテ熟覽セシムルモノトス  
 第三條 物品供給ノ競争ニ加ハラントスル者若クハ契約ヲ結ハントスル者二年以來其物品供給ニ從事シタルコトヲ證明スルニハ 會計規則第六十九條 製造所商會等ニシテ官許ニ係ルモノハ其指令若クハ許可狀ノ寫問屋仲買人等ハ其取締等ノ與書シタル證明書取締等ヲ置カサル商業人ニアツテハ市長村長又ハ區長ノ與書シタル證明書ヲ出ス可シ  
 第四條 物品供給ノ競争ニ加ハラントスル者ノ入札保證金ハ見積代金ノ百分ノ五以上物品供給ノ契約ヲ結ハントスル者ノ契約保證金ハ代金ノ百分ノ十以上 會計規則第七十條 應ニ於テ定ムル所ニ據リ納ム可シ  
 物品拂下ノ競争ニ加ハラントスル者及契約ヲ結ハントスル者ハ各廳ニ於テ定ムル所ニ依リ入札保證金契約保證金ヲ納ム可シ  
 競争入札ノ場合ニ於テハ揭示若クハ公告 會計規則第七十三條 金ノ金高若クハ割合ヲ告知ス可シ



隨意契約ノ保證金額ハ主務官ト請負人ト協議決定スル所ニ依ル但場合ニ依リ保證金ヲ免除スルコトアル可シ

第五條 現金ヲ以テ保證金ヲ納ムルトキハ通貨銀行紙幣兌換銀行券日本銀行正金銀行國立銀行預券等ノ内ヲ以テス可シ但銀行ノ預券ニハ保證金トシテ海軍某廳ニ納ムル旨ヲ明記シタルモノニ限ル

第六條 公債證書ヲ以テ保證金ヲ納ムルトキハ大藏省ニ於テ定ムル所ノ價格ニ據リ書入證書ヲ添付ス可シ但利札ハ拂渡期日前ニ下附ス

第七條 入札保證金ハ入札人開札ノ日之ヲ持參シ掛官ニ出ス可シ契約保證金ハ請負人結約ノ日之ヲ納入ス可シ

第八條 入札保證金ハ落札者契約ヲ結ハサルトキハ官ノ所得トシ會計規則第七十一條落札ナラサル者ニハ即時還附ス

第九條 契約保證金ハ請負人契約ノ義務ヲ果サ、ルトキ及契約書ニ掲クル處分法ニ依リ全額若クハ幾分ヲ官ノ所得トス但天災其他防制ス可カラサル事故アリテ契約ヲ果サ、ルトキハ其事由ヲ調査シ實際己ムヲ得スト認定スルトキハ還附スルコトアル可シ

第十條 契約書ニハ製式、種類、數額、價格、物品受渡期限、保證金額、保證金處分法、

物品ヲ交付スヘキ場所、受渡ノ際施行スヘキ試驗法アルモノハ其方法其他必要ノ條件ヲ遺漏ナシ掲載シ且契約書ニ明文アルモノ、外總テ此規則ニ從フ旨ヲ明記ス可シ會計規則第八十條

第十一條 契約書ニハ鎮守府ニ在テハ主務部長他各廳ニ在テハ廳長署名捺印スルモノトス

契約書ハ二本ヲ作り請負人拂受人ヲシテ捺印セシメ又證人アルモノハ證人ヲシテ捺印セシメ一本ハ官ニ止メ一本ハ本人ニ下附スルモノトス

豫定價格五百圓未滿ノ隨意契約ニ於テ契約書ヲ用ヒサルトキ會計規則第八十二條ハ主務課長若クハ主任官代用書類ニ調印シ請負人ヲシテ署名捺印セシムルモノトス

第十二條 期限ヲ定メ期限内隨時物品供給ノ契約ヲ結ヒタル者非常急遽ノ際注文ヲ受クルモ供給ニ應スルコト能ハサル場合ニ於テハ其需要高キ他人ニ注文シ既定ノ請負高キ減額スルコトアル可シ

第十三條 請負人死亡シ又ハ身代限トナルトキハ相續人又保證人アルモノハ其保證人ニ於テ契約履行ノ責ニ任ス可シ但官ニ於テ其相續人又ハ保證人ニ於テ契約ヲ履行シ難シト認ムルトキハ其契約ヲ解シコトアル可シ

第二章 競争契約

第十四條 競争入札ノ公告會計規則第七十三條ニハ購買賣卻スヘキ物品ノ種類、數量、保證金額、受渡場所、受渡期限、開札時日其他必要ノ事項ヲ掲クルモノトス

第十五條 競争入札ニ付スル物品ニシテ單價ノ見積價額ヲ要スルモノハ其旨ヲ入札公告ニ記載スルモノトス

第十六條 入札書ニハ入札者ノ職業住所ヲ記載ス可シ入札者會社ナルトキハ其社長又ハ代理人ノ住所姓名ヲ記載ス可シ他人ノ代理トシテ入札スルトキハ委任狀ヲ添附ス可シ又二年以來其商業ニ從事シタルコトノ證明書其他必要ノ書類ヲ添附ス可シ

第十七條 入札人ハ入札前此規則及契約書案其他標本等アルモノハ其標本等ヲ熟知シタルモノトシ開札後ニ至リ故障ヲ陳フルコトヲ許サス

第十八條 入札書ハ開札ノ日掛官ニ出スヘシ

第十九條 開札ハ鎮守府ニ於テハ主務部長各廳ニ於テハ各廳長主務課長又ハ購買主任官立會ノ上入札書ヲ開封シ要件ヲ朗讀シ購買ハ最低金額賣卻ハ最高金額ノ入札人ヲ以テ落札人ト定ム但入札保證金ヲ出サ、ルモノ、入札書ハ開封セスシテ卻下ス又入札書其式ニ違ヒ若シハ相當ノ證明書類ヲ出サ、ルモノハ直ニ卻下スルモノトス

第二十條 入札金額一モ豫定價格ノ制限ニ達セス再入札ヲ爲サシムルハ會計規則第七十七條即日同所ニ於テ之ヲ行フ再入札ノ金額仍ホ一モ該制限ニ達セサルトキハ其入札ヲ取消スモノトス

第二十一條 同價ノ入札者ヲシテ再入札セシムルコト及抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ムルコト會計規則第七十八條モ亦即日同所ニ於テ之ヲ行フ

第二十二條 入札書ノ見積價格ヲ定ムルニ單價ヲ用ヒ其合計金額ヲ入札金額トナスニ當リ其單價ヲ計算シ總額ニ誤謬アルトキハ其改正ヲ許スト雖モ單價ノ改正ハ之ヲ許可セス

第二十三條 開札場所ニ於テ見積價格ノ單價ヲ計算スルニ時間ヲ要シ即時落札人ヲ定ムルコト能ハサルトキハ開札時刻後二十四時間以内ニ其單價ヲ精算シ其次日ニ於テ落札人ヲ定ム

第三章 隨意契約

第二十四條 隨意契約ハ鎮守府ニ於テハ主務部長各廳ニ於テハ其廳長ト其契約ヲ結ハントスル請負人トノ間ニ協議シ決定後金額一萬圓未滿ハ十日以内一萬圓以上ハ二十日以内ニ請負人ニ通知シ保證金ヲ納メシメ契約書ニ調印セシム但時宜ニ依リ其延期ヲ要スルトキハ速ニ請負人ニ通知スルモノトス

第二十五條 隨意契約ヲ結ハントスル請負人前條ノ期日以内ニ確定ノ通牒ヲ得ス若クハ確定延期ノ通牒ヲ得タルトキハ其結約ヲ辭スルコトヲ得

第四章 購買物品領收

第二十六條 鎮守府及各廳ニ於テハ検査委員ヲシテ供給物品ノ品質寸尺重量等ノ検査ヲ行ヒ其納入ノ可否ヲ決定セシム

第二十七條 物品供給ノ請負人受渡場所ニ於テ物品ヲ納附スルニハ物品ノ量額單價總價及受渡時日ヲ記載セル納書ヲ作り検査委員ノ調印ヲ得テ之ヲ物品出納主任ニ交付ス可シ領收濟マテノ雜費ハ總テ請負人ニ於テ負擔ス可シ

第二十八條 物品出納主任ニ於テ領收シタル物品ト第二十七條ノ納書ト其數量相合ハサルヲ見出シタルトキハ其事故ヲ之ニ加書シ請負人ニ交附ス該請負人ハ訂正ノ後更ニ検査委員ノ調印ヲ受ケ之ヲ出ス可シ

第二十九條 物品供給ノ請負人ニ於テ物品受渡期日ノ延請期ヲ求セントスルトキハ其期日ヨリ少ナクモ三日以前注文ノ日ヨリ三日以内ニ納ムヘキトキハ直ニ契約書ニ署名シタル主務部長若クハ廳長ニ宛テ理由ヲ詳述シタル願書ヲ出ス可シ

第三十條 供給物品ハ成ルヘク製造所其他供給者ノ記號ヲ附シ若シ物品ニ依リ其記號ヲ附スルコト能ハサルトキハ其外箱若クハ包布ニ之ヲ明記スヘシ

第三十一條 物品領收濟以前ニ其納入スヘキ物品ノ性質變シ若クハ量額減耗スルコトアルトキハ如何ナル場合ニ於テモ官其責ニ任セサルモノトス

第三十二條 検査委員ニ於テ物品ノ検査ヲ行フニハ契約書ニ明記セル試験法ヲ遵守スルモノトス若シ契約書ニ其方法ヲ記載セス又ハ契約書ヲ用ヒサル供給物品ハ其用途ヲ考量シ適宜ノ試験ヲ行フモノトス此場合ニ於テハ試験法ニ對シ請負人異議ヲ陳フルコトヲ得ス

標本雛形等ト契約書ノ記載事項相合ハサルコトアルトキハ契約書ヲ以テ有効ト爲ス

第三十三條 検査委員ニ於テ物品ノ検査ヲ行フトキハ受渡期限前其時日ヲ請負人ニ告知シ其検査ニ立會ハシム該請負人其告知ヲ受クルモ其検査ニ立會ハサルトキハ異日請負人ニ於テ検査委員ノ決定スル所ニ對シ異議ヲ陳フルコトヲ得ス

第三十四條 検査委員ニ於テ物品不合格ト認定シ其納入ヲ排卻スルトキ其金額五百圓以上ノ物品ナレハ調書ヲ作り之ヲ請負人ニ下附ス該請負人其決定ニ承服セサルトキハ三日以内ニ主務課長若クハ購買主任官ヲ經由シ鎮守府司令長官若クハ廳長ニ不服ノ事由ヲ申出ツルコトヲ得但其検査ニ立會ハサルトキハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三十五條 検査委員ニ於テ物品不合格ト認定スルモ請負人ニ於テ修繕又ハ改良ヲ加フレハ其用ニ適シ領收シ得ヘシト思考スルトキハ鎮守府ニ在リテハ司令長官各廳ニ在リテハ廳長其採否ヲ決シ且其修復期日等ヲ定ム但修復若クハ改良ヲ加ヘタル物品ハ更ニ検査委員ニ於テ其検査ヲ行フモノトス

第三十六條 請負人一旦改良若クハ修復ヲ加ヘタル物品ヲ納入セントシ再ヒ其納入ヲ排卻セラレトキハ再ヒ之ニ修復等ヲ加ヘ納入スルコトヲ許サス若シ之ヲ納入セント試ムル者アルトキハ直ニ其契約ヲ解キ契約保證金ヲ官ノ所得トス

第三十七條 排卻シタル物品ニハ其排卻セラレタルコトヲ證スル爲メ符號ヲ附スルコトヲ契約書中ニ記載アルトキハ成ルヘク商品ノ損害ヲナサ、ル符號ヲ定メ請負人ニ其時日ヲ告知シ其立會ヲ得テ之ヲ附スルモノトス但請負人ニ於テ検査委員ノ決定ニ對シ異議ヲ申立テタルコトアルトキハ其決了ノ日マテ記號ヲ附スルコトヲ延期スルモノトス

第三十八條 検査委員ニ於テ物品ノ納入ヲ排卻シ其符號ヲ附スルニ當リ其事故寸法重量等ノ不足ニ止リ物品ノ品質粗惡ナルニ非サレハ請負人ノ願ニ依リ其記號ヲ附セサルコトアル可シ

第三十九條 物品供給ノ請負人物品ノ不合格ヲ以テ排卻セラレ契約書ニ記載スル日

限内若クハ之ヲ搬移スヘキ告知ヲ得タル日限内ニ搬移セサルトキハ其延滞一日毎ニ其物品ノ價格二百分ノ一ニ相當スル金額ヲ徴收ス可シ若シ其日限内ニ搬移セス都合ニ依リ官ニ於テ之ヲ場外ニ搬移シタルトキハ其費用ヲ該請負人ニ要求スルコトアル可シ

第四十條 契約書ニ依リ供給物品ノ積卸其他運搬費用ヲ官ニ於テ負擔スヘキトキ該物品不合格ニシテ其納入ヲ排卻スルトキハ其排卻シタル物品數量ノ割ニ隨ヒ該請負人其費用ヲ辨償ス可シ但物品ノ検査ニ係ル費用ハ辨償スルヲ要セス

第四十一條 物品供給ノ契約書中物品ノ納入ヲ排卻セラレタルトキ更ニ代品ヲ納入スルコトヲ結約シ若クハ契約書ニ明文アラサルモ司令長官若クハ廳長ニ於テ其代品納入ヲ許可シタルトキハ検査委員ニ於テ契約書ニ明文アルニ非サレハ更ニ期限ヲ定メ其期限内ニ納入セシム若シ其代品不合格ニシテ再排卻スルトキハ契約保證金ヲ官ノ所得トシ特別ノ場合アルニ非サレハ更ニ又代品ノ納入ヲ許可セス

第四十二條 検査委員ニ於テ納入ヲ排卻シタル物品ハ減價ヲ以テ納入スルヲ請フモ之ヲ許サ、ルヲ例トス但非常急遽ノ際其納入ヲ許可スルヲ便宜トスルトキハ之ヲ許スコトアルヘシ此場合ニ於テハ鎮守府司令長官若クハ廳長検査委員ヲシテ其相當代價ヲ見積ラシメ請負人ニ協議ノ後購入スルモノトス

第四十三條 物品ノ供給ニ於テ風袋ノ重量ハ別ニ契約書ニ明文アルニ非サレハ検査委員ノ定ムル所ニ依ル又物品ノ外箱細包等ハ官ノ所得トス

第四十四條 検査ニ供用シタル物品ハ検査委員ニ於テ該物品全部ヲ排卻スルトキト雖モ請負人ニ之ヲ補償セズ但検査ニ供用スヘキ物品ノ量額ハ検査委員ニ定ムル所ニ依ル又検査後殘物アルトキハ溶解シタルモノ其他官有物品ニ固著シタル部分ヲ除クノ外請負人ノ請求アルトキハ返卻スルモノトス

第四十五條 供給物品運搬ノ不便其他特別ノ事故ニ由リ生産地ニ就キ領收スルヲ便宜トスルトキハ生産地ニ於テ該物品ヲ領收スルコトアル可シ

第四十六條 生産地ニ於テ物品ヲ領收スルトキハ領收官吏ニ於テ其検査ヲ行ヒ領收スルモノトス若シ検査器械ノ不足等ニ因リ充分ノ検査ヲ行フコト能ハサルトキハ假検査ヲ行ヒ使用地ニ於テ更ニ其検査ヲ行フモノトス

第四十七條 前條ニ依リ使用地ニ於テ再ヒ物品検査ヲ行フトキハ該検査ヲ終了スルマテ該請負人ニ於テ物品ノ合格不合格ニ對シ其責ニ任スルモノトス

第四十八條 生産地ニ於テ領收スル物品ハ別ニ特約アルニ非サレハ使用地マテ運搬中ニ起ル耗損變質其他ノ事項ハ總テ請負人ニ於テ其責ニ任スルモノトス

第五章 物品供給請負人物品拂受人契約履行ニ關スル諸則

第四十九條 非常若クハ急遽ノ場合ヲ除クノ外契約書又ハ注文書ニ記載スル期限後三十日以内ニ物品ヲ納入スルヲ請フトキハ司令長官若クハ廳長ニ於テ其納入ヲ許否スルモノトス

第五十條 物品供給ノ請負人ハ契約書若クハ注文書ニ於テ規定シタル日限内ニ第四十九條ニ依リ延期ヲ許可シタルトキハ許可ノ期限内ニ物品ヲ納入セス若クハ排卻セラレタル物品ノ代品ヲ納入スヘキ期限内ニ之ヲ納入セサルトキハ其翌日ヨリ起算シ延滞日數中一日コトニ物品價格ノ二百分一ニ相當スル金額ヲ納メシムルモノトス

第五十一條 物品ノ供給天災其他防制ス可ラサル事故ニ因リ物品納入ノ期限ヲ後ル、トキハ該請負人其事故ヲ證明スヘキ書類ヲ添ヘ主務課長若クハ購買主任官ニ速ニ之ヲ告知ス可シ

第五十二條 物品ノ供給天災其他防制ス可ラサル事故ニ由リ其納入ノ期限ヲ後ル、トキハ其事情ト需要ノ緩急ヲ酌量シ更ニ期限ヲ定メテ之ヲ納入セシメ別ニ延滞ニ對シ金額ヲ徵收セス但天災其他事故ノ其納入期限ヲ延期セシムルニ足ルヤ否ヤハ鎮守府ニ於テハ主務部長各廳ニ於テハ廳長ノ決定スル所ニ依ル

第五十三條 非常急遽ノ際至急供給ヲ要スル物品アルトキ既ニ同種ノ物品隨時供給ヲ請負ヒタル者アレハ納入期限ヲ定メ其事故ヲ告知スルモノトス該請負人直ニ其

請書ヲ提出セス若シハ期限内ニ之ヲ納入セサルトキハ鎮守府司令長官若シハ團長該物品ヲ他人ヨリ供給セシムルコトヲ得但請負人ニ於テ請書ヲ出シタル後期限内ニ物品ヲ納入セサルトキハ其請書ヲ出シタル日ヨリ其期限マテ一日コトニ物品ノ價格二百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納メシム

第五十四條 物品供給ノ請負人ニ其期限ノ延期ヲ許可シタル後天災其他防制ス可ラサル事故アルニ非スシテ其期限内ニ再ヒ其納入ヲ怠ルトキハ延滞日數一日コトニ物品ノ價格二百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納メシメ保證金ヲ官ノ所得トシ且契約ヲ解クモノトス

第五十五條 數期ニ分テ物品ヲ納入スヘキ契約書ニ於テ其納入スル物品毎次粗惡等ニシテ其過半ヲ排卻スルニ至ルトキハ保證金ヲ官ノ所得トシ其契約ヲ解クモノトス

第五十六條 物品領收ノ際甲應ニ於テ排卻セラレタル物品ヲ乙應ニ供給セントシ若シハ外箱又ハ包布等ヲ以テ物品ノ粗惡ヲ隱蔽セントシ若シハ物品ノ性質重量ヲ變改スヘキ異質ノ物品ヲ混入スル等物品ノ性質數量等ニ對シ詐偽ヲ行ハントスルトキハ直ニ契約ヲ解キ保證金ヲ官ノ所得トス仍ホ損害アルトキハ其賠償ヲ要求スルコトアル可シ

第五十七條 物品ノ供給ニ於テ其期ヲ違フコトナク常ニ良好ノ物品ヲ納入スル等其契約履行ニ於テ聊カ不都合ナキトキハ更ニ其契約ヲ繼續スルコトアル可シ但其價格ハ從前ノ契約ニ超過スルコトナキモノトス

第五十八條 物品供給ノ請負人ニ於テ前條ニ依リ契約ヲ繼續セント欲スルトキハ主務課長若シハ購買主任官ニ願出ツ可シ

第五十九條 物品拂下人期日内ニ代價ヲ納入セサルトキハ保證金ヲ官ノ所得トシ契約ヲ解クモノトス數期ニ分テ代價ヲ納入スルノ契約ニシテ既ニ納入セル代金アルトキハ之ニ相當スル物品ヲ交附スルコトアル可シ

●各廳物品購買賣却通則

明治二十三年二月 海軍省達第五十六號

各廳物品購買賣却通則左ノ通定ム

各廳物品購買賣却通則

第一條 海軍各廳ニ於テ物品ヲ購買賣却スルニハ本年告示第五號物品購買賣却規則ニ依ル可シ又可成同種ノ物品ヲ同時ニ處分ス可シ  
第二條 糧食品又ハ常用消耗品ニシテ常時供給ヲ要スルモノハ其價格ト期限ヲ定メ隨意購買スルコトヲ得







第二條 海軍兵備品ノ會計ハ本則ニ明文アルモノヲ除クノ外物品會計規則ニ依ル

第三條 鎮守府ニ在ル兵器、彈藥、水雷ノ保管出納ハ武庫主管ヲシテ掌理セシム

第四條 物品會計規則第十四條ニ依リ大藏大臣ニ送付スル報告書及同規則第十五條第十七條ニ依リ會計検査院ニ送付スル計算書中兵器、彈藥、水雷及其附屬品並祕密圖書、測器海圖ハ價格ノミヲ明記スヘシ

兵器、彈藥、水雷及其附屬品ノ數量ノ精確ハ檢閱官ノ證明書ヲ以テ保證シ祕密圖書、測器海圖ノ數量ノ精確ハ圖書、測器ヲ管理スル官吏ヲ統轄スル長官ノ證明書ヲ以テ保證スヘシ

第五條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

●會計監督部ノ調査ヲ經タル物品購買賣却及工事請負ニ係ル契約ノ改廢等ニ關スル事項通知方

明治二十三年九月  
陸軍省達第三百二十一號

物品購買賣却及工事請負ニ係ル契約書中會計監督部ノ調査ヲ經タルモノニシテ納期又ハ竣工期限ヲ延期シ若クハ工事ヲ中止シ又ハ廢止シ其他契約ノ改廢等ニ關スル事項ハ總テ其調査ヲ經タル會計監督部ニ通知スヘシ

●鎮守府造船材料資金會計規則 明治二十三年三月 勅令第三十四號

朕鎮守府造船材料資金會計規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鎮守府造船材料資金會計規則

第一條 造船材料資金ハ貯蓄材料賣拂代金ヲ以テ歲入トシ材料購入代及損失金ヲ以テ歲出トス

第二條 造船材料資金ノ歲出ハ實際ノ歲入額及資金ニ屬スル現金ノ持越高ヲ以テ支辨スヘシ

第三條 歲入歲出ノ豫算決算ハ作業及鐵道會計規則第二章ノ例ニ依ル

第四條 收入支出ノ取扱ハ作業及鐵道會計規則第三章ノ例ニ依ル但作業事務長ノ職務ハ主計部長之ヲ行フヘシ

第五條 貯蓄材料ノ價格ハ總テ購入及改製代價ヲ以テ計算スヘシ

第六條 貯蓄材料ヲ工場ニ使用スルトキハ購入代價ニ損減歩合ヲ加ヘテ之ヲ賣拂フヘシ

第七條 貯蓄材料ノ損減歩合ハ毎年前々年度ノ損減高ニ基キ之ヲ定ム

第八條 歲入額收入未濟額資金ニ屬スル現金ノ持越高及總材料ノ價格代價支出濟未

收物品ノ價格ヲ以テ受入トシ歲出額支出未濟額資金額賣拂代收濟材料ノ價格損失ニ歸シタル材料ノ價格及損失金ヲ以テ拂出トシ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ扣除シ過剩アルトキハ造船材料賣拂益金トシテ之ヲ同年度ノ一般ノ歲入ニ納付スヘシ

第九條 材料ノ買入不用材料賣拂ノ規程ハ總テ會計規則第七章ノ例ニ依ル

第十條 出納官吏ニ關スル規則ハ總テ作業及鐵道會計規則第七章ノ例ニ依ル

第十一條 帳簿ニ關スル規則ハ總テ作業及鐵道會計規則第八章ノ例ニ依ル但作業所ハ主計部ヲ以テ之ニ充ツ

第十二條 本規則ニ依リ出納官吏ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十三條 前條ノ外本規則ニ掲クル諸書類帳簿ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第十四條 本規則ハ明治二十三年度ヨリ施行ス

●鎮守府造船材料資金會計法

明治二十三年三月 法律第十九號

朕鎮守府造船材料資金會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
鎮守府造船材料資金會計法

第一條 鎮守府造船工場ニ於テ船舶ヲ製造修理スル爲メニ要スル材料貯蓄ノ資本トシテ造船材料資金ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 造船材料資金ハ從來橫須賀鎮守府小野濱造船所ニ備ヘタル營業資本ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 造船材料資金ヲ以テ貯蓄シタル材料ヲ使用スルトキハ海軍省所管經費ヲ以テ之ヲ購入スヘシ

第四條 造船材料資金ヲ以テ貯蓄シタル材料ノ損滅ハ豫メ歩合ヲ定メテ材料原價ニ加算スヘシ

第五條 每會計年度ニ於テ造船材料資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其過剩金ヲ同年度一般ノ歲入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年造船材料資金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 造船材料資金ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

●工事請負規則

明治二十三年三月 海軍省告示第九號



其事由天災其他防制スヘカラサル事故ニ原由スルモノト認定スルトキハ還付スルコトアルヘシ

第十一條 契約書ニハ請負事項、請負金額、保證金額、始終期限、保證金處分法、金額仕拂期限、其他一切必要ナル條件ヲ掲載シ且契約書ニ文明アルモノ、外總テ本規則ニ從フ旨ヲ明記シ會計規則第八十條之ニ仕様書仕譯書等必要書類ヲ添付スヘシ

第十二條 契約書ニハ請負人保證人連署捺印シ鎮守府ニ在テハ建築部長第二局ニ在テハ局長若クハ主務課長署名捺印スルモノトス

契約書ハ正副二本ヲ作り一本ハ官ニ留メ一本ハ請負人ニ於テ所持スルモノトス豫定價格五百圓未滿ノ隨意契約ニ於テ契約書ヲ用ヒサルトキ會計規則第八十二條ハ請負人署名捺印シタル其代用書ニ主務課長若クハ主任官調印スルモノトス

第十三條 請負人死亡シ又ハ身代限トナルトキハ保證人ニ於テ請負本人ト同一ノ資格アル者ヲ撰ミ官ノ許可ヲ得テ契約ヲ履行セシムヘシ若シ保證人其義務ヲ果サ、ルトキハ契約ヲ解キ保證金ヲ官ノ所得トス但既濟部分ニ對スレ仕様金額ハ検査官吏ノ調定會計規則第六十七條ニ依リ下附スヘシ

第二章 競争契約

第十四條 競争入札ノ公告會計規則第七十三條ニハ其入札ニ附スヘキ事項、設計圖仕様書等必

要ナル書類ヲ示ス場所、工事主任官吏ノ職氏名、開札日時、保證金額其他必要ノ事項ヲ掲クルモノトス

第十五條 入札書ニハ必ズ仕譯書ヲ添ヘ入札人ノ職業住所姓名ヲ記載スヘシ入札者會社ナルトキハ其社長又ハ代理人ノ住所姓名ヲ記載スヘシ他人ノ代理トシテ入札スルトキハ委任狀ヲ添附スヘシ又二年以來其職業ニ從事シタル證明書ヲ提出シ且相當ノ資産ヲ有スル保證人之ニ連署調印ス可シ

第十六條 入札人ハ入札前本規則及設計圖、仕様書等必要ナル書類其他現工場等ヲ熟知シタルモノト爲ルヲ開札後ニ至リ故障ヲ陳フルコトヲ許サス

第十七條 入札書ハ開札ノ日掛官ニ出ス可シ

第十八條 開札ハ鎮守府ニ在テハ建築部長第二局ニ在テハ局長又ハ主務課長立會ノ上入札人ノ面前ニ於テ主任官入札書ヲ開封シ其要件ヲ朗讀記帳シ最低金額ノ入札人ヲ以テ落札者ト定ム但入札保證金ヲ出サ、ル者ノ入札書ハ開封セスシテ却下ス又仕譯書ヲ添附セス入札書其式ニ違ヒ相當ノ證明書類ヲ出サス若クハ保證人ヲ有セサル者ノ入札ハ直ニ却下スルモノトス

第十九條 入札金額一モ豫定價格ノ制限ニ達セス再入札ヲ爲サシムル會計規則第七十七條トキハ即日同所ニ於テ之ヲ行フ再入札ノ金額仍ホ一モ該制限ニ達セサルトキハ其入札

ヲ取消スコトアルヘシ

第二十條 落札トナルヘキ同價ノ入札人數名アルトキハ即日同所ニ於テ再入札ヲ爲  
サシメ仍ホ同價ノ入札人アルトキハ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ム會計規則第七十八條

第二十一條 第十九條及前條ニ依リ再入札ヲ爲シタル落札者ハ二日以内ニ其落札金  
額ニ對スル仕譯書ヲ出スヘシ之ヲ出サ、ルトキハ保證金ノ全額若クハ一部ヲ官ノ  
所得トシ契約ヲ結ハサルコトアルヘシ

第二十二條 入札金額ノ仕譯書ニ誤謬アルトキハ其訂正ヲ許スト雖トモ入札金額ノ  
改正ハ之ヲ許サス

第三章 隨意契約

第二十三條 隨意契約ハ鎮守府ニ在テハ建築部長第二局ニ在テハ局長若クハ主務課  
長其契約ヲ結ハントスル請負人ヲシテ見積價格書及仕譯書ヲ出サシメ其金額五千  
圓未滿ハ一週日以内五千圓以上ハ二週日以内ニ之ヲ決定シ請負人ニ通知シ保證金  
ヲ納メシメ且契約書ニ調印セシム但時宜ニ依リ延期ヲ要スルトキハ速ニ請負人ニ  
通知スルモノトス

第二十四條 一口五百圓未滿ノ隨意契約ノ場合ニ於テハ主務課長若クハ主任官ハ請負  
人ヲシテ見積價格書及仕譯書ヲ出サシメ五日以内ニ之ヲ決定シ請負人ニ通知シ仕譯

書又ハ承諾書ニ調印セシム但保證金ヲ要スルトキハ前條ニ依ル

第二十五條 隨意契約ヲ結ハントスル請負人前兩條ノ期日內ニ確定ノ通知ヲ得ス若  
クハ確定延期ノ通知ヲ得タルトキ其結約ヲ辭スルコトヲ得

第四章 工事ノ施行及検査

第二十六條 工事請負ノ契約ハ請負人ニ於テ自ラ工事ニ係ル一切ノ事項ヲ擔任シ官  
ノ許可ヲ得スシテ工事ノ全部若クハ一部ヲ他人ニ請負ハシムルコトヲ得ス若シ許  
可ヲ得スシテ之ヲ他人ニ請負ハシムルコトアルトキハ保證金ノ全額若クハ一部ヲ  
官ノ所得トシ契約ヲ解クコトアル可シ

第二十七條 工事ハ契約書ニ記載スル日時ニ必ス其工事ニ著手シ工事主任官吏ノ指  
揮アルニ非サレハ仕様書設計圖等ヲ遵守シ少シモ之ヲ變更スルコトヲ許サス

第二十八條 海軍官廳ノ構内ニ於テ工事ヲ施行スルトキハ請負人必ス構内取締ニ係  
ル諸則ヲ遵守シ材料物品ノ出入火災ノ豫防其他一般ノ事項ニ注意シ日々ノ服業時  
間ハ工事主任官吏ノ許可ヲ受ク可シ

第二十九條 工事施行中現工場ニハ請負人若クハ適當ノ代理人常ニ臨在シ工事ニ係  
ル事項ヲ擔任シ工事主任官吏ノ巡檢スルトキハ必ス之ニ隨伴ス可シ若シ主任官吏  
ニ於テ成績不充分ト認ムル所アルトキハ直ニ之ヲ改修セシム

第三十條 請負人ハ其使役スル職工人夫等ノ行爲ニ係ル一切ノ責ニ任スルモノトス若シ官ニ於テ職工人夫中強硬命ニ服セス其他不正ノ行爲等アルモノアルカ若クハ從前海軍官應ニ於テ使役シ行爲不正ノ爲解雇シタルモノ等アルトキハ其使役ヲ禁止スルコトアルヘシ

第三十一條 工事ニ使役スル職工ハ各職業ニ區別シ其工程ニ依リテ人員ヲ配置シ一週間毎ニ其名簿ヲ工事主任官吏ニ出ス可シ

第三十二條 工事ニ使用スル材料物品ハ其工場掛官若クハ主任官吏ヲシテ運入コトニ検査セシム検査ヲ經サル材料物品ハ一切使用スルコトヲ許サズ

第三十三條 工事ニ使用スル倉庫車馬器具器械等及其雜費ハ契約ニ明文アルモノヲ除クノ外總テ請負人ニ於テ調辨スルモノトス若シ官有倉庫等ヲ使用セシムルトキハ相當ノ使用料ヲ徵收スルモノトス

第三十四條 工事ノ全部若クハ其一部ノ竣成シタルトキハ建築部長若クハ主務課長ヲシテ竣功検査ヲ行ハシム其成績合格ト認ルトキハ其契約書ニ署名捺印シタル部局課長ヨリ請負人ニ證書ヲ付與ス但之ヲ付與スル以前ニ於テハ其築造物件ニ何等ノ故障アルモ官其責ニ任セス

第三十五條 竣功検査ヲ行フトキハ其時日ヲ請負人ニ告示シ其検査ニ立會ハシム該

請負人其告知ヲ受クルモ検査ニ立會ハサルトキハ検査ノ結果ニ對シ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第三十六條 竣功検査ニ於テ其成績不合格ト認ルトキハ司令長官若クハ局長ノ特許スル日數ヲ限り之ヲ改修セシム

第三十七條 請負人ニ於テ検査諸員ノ認定ニ服スルヲ得サルトキハ三日以内ニ當該官吏ヲ經由シ司令長官若クハ局長ニ其事由ヲ申立ルコトヲ得

第五章 契約履行ニ關スル諸則

第二十八條 請負人ニ於テ契約書若クハ其代用書類ニ明記シタル竣功期限ノ延期ヲ請求セントスルトキハ其期日ヨリ少ナクモ三日以前ニ理由ヲ詳述シタル願書ヲ出スヘシ

司令長官若クハ局長前項ノ願書ヲ受ケタルトキハ契約書若クハ其代用書類ニ明記シタル請負日數ノ五分ノ一以内ノ日數ヲ限り許否スルモノトス

第三十九條 契約書若クハ其代用書類ニ明記シタル竣功期限内(許可ニ係ル延期日ニ其數モ此内ニ含有ス)ニ其事項ヲ竣ラス又ハ改修期限内ニ之ヲ改修セサルトキハ其翌日ヨリ起算シ延滞日數一日コトニ請負金額ノ二百分ノ一ニ相當スル金額ヲ請負金額ノ内ヨリ減殺スルモノトス

前項ノ延滞日數契約書若クハ其代用書類ニ明記シタル期限日數ノ五分ノ一ニ相當スル日數ニ及フトキハ直ニ契約ヲ解キ其保證金ヲ官ノ所得トス但既濟部分ニ對スル金額ハ検査官吏ノ測定スル所ニ依リテ之ヲ付下ス

第四十條 天災其他防制スヘカラサル事故ニ因リ約定期限ヲ後ル、トキハ該請負人其事故ヲ證明スヘキ書類ヲ添へ速ニ主務課長若クハ主任官吏ニ之ヲ告知スヘシ前項ノ場合ニ於テ其約定期限ヲ改ムルト否トハ局長若クハ建築部長ノ決定スル所ニ依ル

第四十一條 請負事業著手ノ後官ノ都合ニ依リ一時中止又ハ廢止ヲ要スルトキハ請負人ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス但廢止ノ場合ニ在テハ保證金ヲ還附シ其既濟部分及現場ニ運入シタル材料ニ對スル金額ヲ下付シ及運入ニ係ル雜費ヲ辨償シ其材料ハ官ノ所得トス

第四十二條 前條ニ依リ工事請負人ニ於テ工事ヲ一時中止セラレ其中止一年以上ニ及フトキハ其契約ヲ辭スルコトヲ得此場合ニ於テハ保證金ヲ還附スル等前條工事廢止ノ例ニ依ル

第四十三條 官ノ都合ニ依リ請負事業ノ一部若クハ數部ノ變換ヲ要スルトキハ請負人ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得サルモノトス但此場合ニ在テハ仕譯書ヲ改調セ

シメ請負金額ヲ増減スヘシ

第四十四條 請負人ハ建造物件ノ性質ニ依リ保存期ヲ約定シ其期限中ニ生シタル破損等建造ノ粗略ニ基キタル證アルモノハ自費修理スルモノトス若シ此修理ヲ怠ルトキハ官ニ於テ之ヲ修理シ其實費ヲ支辨セム但時宜ニ依リ保證金トシテ契約保證金ノ一部ヲ官ニ領置スルコトアルヘシ

○第七類

○恩給 扶助

●官吏恩給法

明治二十三年六月  
法律第四十三號

朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受ケルノ權利ヲ有ス

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一 年齡六十歲ヲ超エ退官ヲ許シタルトキ

二 傷疾ヲ受ケ若シハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

一 公務ニ因リ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職



務ニ堪ヘス退官シタルトキ

二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ従事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス  
交際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス  
兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ  
恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷痍疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ查覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年

二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス

明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ  
一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數  
二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數  
三 從軍年加算ノ年月  
四 非職及休職中ノ月數

- 五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數
  - 六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數
- 第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ
- 一 年齢二十歳未滿者ノ在官月數
  - 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
  - 三 郡區書記ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數
  - 四 御用掛雇等外出仕勤任ノ月數
  - 五 第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數
  - 六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數
- 第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス
- 第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス
- 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後

- 官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
- 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサルハ増加セス
- 第十二條 恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス
- 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス
- 一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
  - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ
- 第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ
- 法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス
- 第十四條 政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス但郡區書記ハ此限ニアラス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限リ退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六箇月以內ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷痍疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エルト否ラサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ三箇年內ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス  
從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

●官吏恩給令施行規則

明治二十三年七月  
閣令第三號

官吏恩給法施行規則左ノ通定ム  
官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ

差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 在官中履歷書

二 市町村長ノ證明シタル戶籍調書

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付スルニ及ハス

第四條 公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲ケル

書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求

スル者亦同シ

一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書

二 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ査覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ

請求者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出ス

ヘシ

各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナント認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ

差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り本屬廳ヲ經テ本

人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ  
恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ大藏省ヨリ  
本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但權利消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘  
ハラズ之ヲ支給ス

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領權ア  
ルコトヲ證明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ從來ノ居住地ノ地方廳  
及轉籍若クハ寄留地ノ地方廳ニ其旨ヲ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏省ニ通知シ各廳間互ニ其者ニ係ル  
恩給支給方ノ受繼ヲ爲スヘシ

大藏省ニ於テ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ内閣恩給局ニ通知スヘシ

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タル  
ノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一個月分ニ相當スル金額トス

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

第二項	兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ	十分ノ七
第三項	前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ	十分ノ六
第四項	一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ	十分ノ五
第五項	前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ	十分ノ四
第六項	一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ	十分ノ三
第七項	前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ	十分ノ二

傷痕疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痕疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給証書ヲ返納スヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ

地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ内閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

- 一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ
- 二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若シハ寄留スルトキ

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

● 恩給及扶助料受領ノトキハ生存證書ヲ添付セシム

明治二十三年十月  
大藏省令第二十四號

本年法律第四十三號第四十四號第四十五號ニ據リ恩給及扶助料ヲ受クルモノハ每期受領ノトキハ本人生存證書ヲ恩給證書ニ添ヘ差出スヘシ

● 官吏遺族扶助法

明治二十三年六月  
法律第四十四號

朕官吏遺族扶助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任以上ノ者左ニ掲グル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニ在ラス

一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ  
 二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ  
 三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ  
 第二條 文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ  
 第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲ爲スヘシ  
 政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ノ俸給及兼官ニ依テ受クル加俸ニ對シテハ第二條ノ納金ヲ要セス  
 第四條 寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス  
 公務ノ爲メ受ケタル傷痕ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス  
 扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム  
 第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス  
 第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス  
 第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未ダ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル  
 第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス  
 第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得  
 其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル  
 第十一條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニアル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹

アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラズ一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルヲ得

第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十三條 扶助料ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス  
一 寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月  
二 孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿チタル月ノ翌月

三 父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス

第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乗シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六箇月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

●官吏遺族扶助法施行規則

明治二十三年七月 閣令第四號



官吏遺族扶助法施行規則左ノ通定ム

官吏遺族扶助法施行規則

第一章 扶助料ノ請求

第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ

第二條 官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷痕若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條 公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ癡疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ後見人アルハ其後見人連署スヘシ親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長ノ與印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ掲クル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添附シ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ  
内閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 納金ノ徵收

第九條 官吏遺族扶助法第二條ニ掲クル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ

第三章 扶助料ノ支給及停止

第十條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第一第三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルト

キハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證

書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十二條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキ

雜則

第十三條 大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行

規則第十六條ノ例ニ依ル

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改

氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同

令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

第十六條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲メヘキ

●官吏遺族扶助法納金收入規則

明治二十三年七月 勅令第百二十五號

朕官吏遺族扶助法納金收入規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法納金收入規則

第一條 本年法律第四十四號官吏遺族扶助法第二條ニ依リ文官判任以上ノ者ヨリ國

庫ニ納ムヘキ金員ハ俸給仕拂ノトキ金庫ニ於テ之ヲ差引ヘシ但現金前渡ヲ受ケタ

ル官吏ニ於テ俸給ノ仕拂ヲナストキハ該官吏ニ於テ之ヲ差引ヘシ

第二條 前條ニ依リ金庫ニ於テ差引シタル金員ハ收入官吏ヨリ金庫ヘノ拂込ニ移シ

テ計算シ直ニ報告書ヲ作り之ヲ收入官吏ニ送付スヘシ

前條ニ依リ現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ於テ差引シタル金員ハ納金額表ヲ添ヘ之ヲ

收入官吏ニ送付スヘシ

第三條 俸給ノ増減ニ依リ既納ノ金員ニ過不足ヲ生スルトキハ次期ノ俸給支給ノト

差引スヘシ

●官吏遺族扶助法納金收入規則取扱順序

明治二十三年七月  
大藏省訓令第百十三號

本年勅令第百二十五號官吏遺族扶助法納金收入規則取扱順序左ノ通り心得ヘシ

第一條 會計主務官ニ於テ本年大藏省令第十七號ヲ以テ規定シタル書式ノ仕拂命令仕拂請求書ヲ受ケタルトキハ之ヲ調定シ其集合仕拂命令集合仕拂請求書又ハ金庫所在地外ヘ送金ヲ要スル稟書アル仕拂命令仕拂請求書ニ對シテハ第一號書式ノ領收證書用紙ニ式ノ如ク記入捺印シ之ヲ受取人ヘ交付スヘシ但此場合ニ於ケル手續ハ本年大藏省訓令第十八號第二十三條ニ同シ

第二條 金庫ニ於テ仕拂命令仕拂請求書ヲ受ケ現金ノ仕拂ヲ執行スルトキハ該仕拂命令仕拂請求書金額ノ内譯ニ列記シタル(集合仕拂命令集合仕拂請求書ニ付屬スル金額氏名ニ依ル) 國庫納金引去高ヲ扣除シ現金支給高ヲ受取人ニ交付スヘシ 表中ノ者ヘ交付スルトキハ即該氏名表金額ノ内譯右扣除ノ國庫納金引去高ハ普通仕拂ノ順序ニ依リ一旦之ヲ拂出シ直ニ之ヲ相當年度ノ歳入ニ振替納付ヲナスヘシ  
金庫出納事務規程第十五條ノ送金ヲナス場合ト雖モ國庫納金引去高ハ前項ノ順序

ニ據ルモノトス

第三條 金庫ニ於テ前條ノ國庫納金引去高ヲ歳入金ニ振替納付シタルトキハ即日第二號書式ノ國庫納金引去高收入報告書ヲ調製シ收入官吏ヘ送付スヘシ

第四條 收入官吏ニ於テ歳入ノ調定官ヨリ官吏遺族扶助法ニ據リ收入スヘキ金額ノ通知ヲ受ケタルトキハ收入簿調定濟額ノ欄内ヘ其金額ヲ登記スヘシ

第五條 收入官吏ニ於テ第三條ノ國庫納金引去高收入報告書ヲ受ケタルトキハ收入簿收入濟額ノ欄内ヘ其金額ヲ登記スヘシ

第六條 現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ於テ俸給仕拂ノトキ官吏ノ納金額ヲ差引徴收シタルトキハ第三號書式ノ納金額表ヲ添ヘ之ヲ其應ニ於テ普通ノ諸收入ヲ收入スル官吏ニ拂込ヘシ

第七條 前條ノ拂込ヲ受ケタル收入官吏ハ其拂込ヲナシタル收入官吏ニ現金ノ領收證書ヲ交付シ收入簿現金出納簿ノ登記及金庫ヘ拂込ノ手續ヲナスヘシ

第八條 現金前渡ヲ受ケタル官吏ハ第六條ノ場合ニ於テハ現金ヲ領收スル收入官吏トシテ總テ其規程ニ依ルモノトス但會計規則第三章ニ定メタル收入報告書ヲ差出スニ及ハス

第一號書式

領收證書

備考

〔第一〕 集合仕拂命令集合仕拂請求書ノ内受取總代人へ交付スヘキ分又ハ各總ニ於テ局(課)員申合セノ上受取總代人ヲ選定シタルニ據リ其總代人へ仕拂ノタメ仕拂命令仕拂請求書ヲ發シ金庫所在地外へ送金ヲ要スル分ノ領收證書受取人ノ欄内へハ何應勤務何ノ誰外何人總代人何ノ誰ト記入スヘシ

第 [何] 號	受取人	何應勤務ノ誰
〔某〕年度〔集合〕仕拂〔命令〕第〔何〕號〔ノ内〕印		
一金〔貳拾圓也〕 俸 給 高		
内 金〔拾九圓八拾錢也〕 現金支給高		
内 金〔貳拾錢也〕 國庫納金引去高		
〔第〕壹〔號〕〔金額〕氏名表内譯ノ番號ト符合ス		
右領收候也		
明治〔何〕年〔何〕月〔何〕日		
〔何地〕金庫宛		
〔受取人〕		
〔何〕ノ誰		
印		

〔内及印章ハ朱〕

第二

第二號書式

報告表 高收入引去金納庫

之 要 領		收入金額	收入取扱	備 考
仕拂命令官官氏名	債主氏名			
[某][某]	[某] 外 何 人	0200 1000	[某][某]	
締 高 氏		1200		

〔第二〕 本書式ニ示サ、ル要部ハ總テ本年大藏省則令第十八號附屬書式ニ依ルヘシ

治〔何〕年〔何〕月〔何〕日  
 〔何地〕金庫  
 收入官吏官氏名宛



前	年
所管廳	二十三年
「某」	
「某」	

●官吏恩給法施行規則官吏遺族扶助法施行規則ニ依リ  
 在官年數及恩給扶助料年額計算書式  
 明治二十三年七月  
 内閣訓令第八號

官吏恩給法施行規則第五條及官吏遺族扶助法施行規則第八條ニ依リ差出スヘキ在官  
 年數及恩給扶助料ノ年額計算書ハ左ノ書式ニ準據スヘシ

但明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給及扶助料ヲ請求スル者ノ計算書ハ明治十八  
 年達官吏恩給令附則第三書式ニ依ルヘシ

第一書式

在官年數及恩給年額計算書

元官名 位勳爵 氏 名  
 明治何年何月 何年何月生 何年何箇月

明治四年	八月一日	七月以前ヨリ勤続 官	何年何箇月
同	何年何月何日	任 何 官	除 算
同	何年何月何日	何々ニ依リ退官	
同	何年何月何日	任 何 官	何年何箇月
同	何年何月何日	任 何 官	
同	何年何月何日	非 職	何年何箇月
同	何年何月何日	何々ニ依リ退官	
從 軍 年			
同	何年何月何日	内國何港出發	何々從軍 加算 何年
同	何年何月何日	内國何港歸著	
同	何年何月何日	戰地ニ臨ミ	何々從軍 加算 何年
同	何年何月何日	戰地ヲ退ク	
通計何年退官現時俸給年額金何圓ノ二百四十分ノ若干			(恩給年額ト増加恩給年額トヲ合セタル金額ノ四分ノ一)
計 何年何箇月			計 何年

第七類 恩給扶助

三〇

恩給年額金何圓 傷疾(疾病)第何項恩給最下金額何圓ノ十分ノ者 干 増加恩給年額金何圓	每期給額 金何圓何拾何錢 明治何年何月ノ給額金何圓何拾何錢(初期給額)
右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也	
明治何年何月	(取調主任) 官 氏 名印

交際官及領事官事務官等ハ恩給年額ノ月俸俸給ノ上ニ(勅任(委任)(判任)何等ニ對スル普通文官ノ)文字ヲ加フヘシ 第二第四書式モ亦同シ  
非職滿期退官ノ者ハ恩給年額ノ月書通計何年ノ下(退官現時)ヲ在職最終ト記スヘシ第二書式モ亦同シ

第二書式 恩給年額計算書

年月日任免ノ書式ハ 第一書式ニ依ル	何年何箇月 (此年月ハ官吏恩給法ニ依リ 通算シタル年月數ヲ掲ク)	計 何年何箇月
右退官ノ節受ケタル恩給年額金何圓		

在官年數及恩給年額計算書

元官名 位勳爵 氏 名 何年何月生 明治何年何月 何年何箇月
---

年月日任免ノ書式ハ 第一書式ニ依ル	何年何箇月	計 何年何箇月
通計何年退官現時俸給年額金何圓ノ二百四十分ノ若干	每期給額 金何圓何拾何錢	
恩給年額金何圓 前ノ恩給年額ニ比較シ金何圓増	明治何年何月ノ給額金何圓何拾何錢(初期給額)	
右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也		
明治何年何月	(取調主任) 官 氏 名印	

第三書式 恩給ヲ受ケタル者死去ノ後扶助料ヲ請求シタル者ニ用ユ

扶助料年額計算書	元官名 故位勳爵氏名寡婦(孤兒)(父母)(祖父母) 氏 名
恩給年額金何圓ノ三分ノ二(二)	何年何月生 明治何年何月 何年何箇月
扶助料年額金何圓	每期給額 金何圓何拾何錢
右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也	明治何年何月ノ給額金何圓何拾何錢(初期給額)
明治何年何月	(取調主任) 官 氏 名印

第七類 恩給扶助

三一

第七類 恩給扶助

恩給ヲ受クヘキ資格ヲ有シテ死去シタル者ノ遺族ヨリ扶助料ヲ請求シタルトキハ此計算書ノ外第一若クハ第二書式ノ計算書ヲ添付スヘシ  
扶助料ノ轉給ヲ請求シタル者ニハ此計算書中恩給年額ノ一行ハ記載スルニ及ハス

第四書式

一時扶助金計算書

故官位勳爵氏名寡婦(孤兒)(父母)(祖父母)氏名

故氏名在官年數

年月日在免ノ書式ハ  
第一書式ニ依ル

明治何年何月何日 死

何年何箇月

計何年何箇月

在職最終俸給年額金何圓ノ百分ノ一金何圓何拾何錢ヲ在官年數ニ乘シタル額  
金何圓何拾何錢

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

明治何年何月

(取調主任) 官氏名印

第五書式

明治四年七月以前ニ係ル在官年數及恩給計算書

元官名 位勳爵氏名

明治何年何月何日 任 何官	何年何箇月
同何年何月何日 任 何官	
同四年七月三十日(任) 何官	
明治四年七月現官等ノ官祿一箇月分 米 何石	
但明治四年六月東京淺草米屋平均相場 一石ニ付金五圓九拾六錢六厘六毛	
此金何圓何拾何錢何厘	
右代金ノ半額金何圓何拾何錢何厘ヲ在官何年ニ乘シタル額	
金何圓何拾何錢何厘	
右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也	
明治何年何月	
(取調主任) 官氏名印	

參照  
明治十八年達官吏恩給令附則第三書式

恩給計算書

官

氏名 明治何年何月何年何月生 何年何箇月

明治四年八月以前ノ任官  
明治四年八月ノ任官

何年何月何日 任 何官
何年何月何日 退 官

何年何箇月

第七類 恩給扶助





- 一 救助料ヲ分テ二等トス
  - 一等 俸給五箇月分日給百五十日
  - 二等 俸給三箇月分日給九十日分
- 一 感染者死亡シタルキハ一等救助料ヲ給シ死亡セサルキハ二等救助料ヲ給ス
- 一 療治料ハ一日壹圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セス

●市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

明治二十三年十月 法律第九十號

朕市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

- 第一條 市町村立小學校ノ正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス
- 第二條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス
  - 一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ
  - 二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ
  - 三 廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第三條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

- 一 職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ
- 二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第四條 官吏恩給法第五條第一項第四項第六條第十一條ハ退隱料ニ適用ス

退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失フモノトス

- 一 失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ
- 三 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
- 四 第二條第二第三條若クハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者復タヒ其職務ニ堪フルニ至ルコトアルモ仍府縣知事ヨリ指命セラレ、所ノ教職ニ就カサルトキ又

ハ第二條第三ニ依リ退隱料ヲ受クル者府縣知事ヨリ任命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ但其給料ハ退職現時ノ給料ヨリ少額ナラス且年齢未タ六十歳ニ至ラサル場合ニ限ル

五 府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ  
退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 公務ニ就キ退職現時ノ給料額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ
- 二 三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ
- 三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條 市町村立小學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第三條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ給料四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第八條 在職滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル市町村立小學校正教員ハ退職現時ノ給料二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ給料三箇月分ニ當ル金員ヲ給ス

第二條第三條又ハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者

又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日市町村立小學校正教員ノ職ニ就クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退隱料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノトス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立サル者ハ本文ノ限ニ在ラス

第九條 退隱料ノ支給及第八條ノ給與ハ市町村長ノ證明ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十條 市町村立小學校正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

- 一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ
- 二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ
- 三 退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條 官吏遺族扶助法第四條第一項第二項第五條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母

祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未満又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十二條 在職十五年未満ノ市町村立小學校正教員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職三年未満ニシテ在職最終ノ給料一箇月分ニ當ル金員トシ三年以後滿一年毎ニ給料年額百分ノ二ニ當ル金員ヲ加フ

第十三條 扶助料及扶助金ノ支給並第八條及第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

第十四條 府縣ハ小學校教員恩給基金ヲ備フヘキモノトス

市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正教員ノ給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

市町村立小學校正教員ハ其給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

本條第二項及第三項ノ納金ハ府縣小學校教員恩給基金ト爲スヘシ

恩給基金ハ其利子ヲ以テ退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス

本條第二項及第三項ニ依リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額四分ノ一ニ當ル金員ヲ収入年度ノ翌々年度毎ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス

退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條 此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十五年年度ヨリ之ヲ施行ス

第十六條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シテ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

●府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺

族扶助料法

明治二十三年十月  
法律第九十一號

朕府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條 府縣立師範學校長ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

第二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第三條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス  
一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ

二 傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三 廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第四條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

一 職務ニ依リ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ

堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第五條 官吏恩給法第五條第一項第四項第五項第六條及第十一條ハ退隱料ニ適用ス

第六條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ヨリ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ轉シタル者ハ該官立公立學校ニ於ケル勤務ノ年數ヲ退隱料等ノ給與上在職年數ニ算入スヘキモノトス其在職年數ノ算定ニ關スル規則並府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ト認ムヘキ者ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失フモノトス

一 失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ

二 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

四 第三條第二第四條若クハ第九條ニ依リ退隱料ヲ受クル者復タヒ其職務ニ堪フルニ至ルコトアルモ仍官ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ又ハ第三條第三ニ依リ退隱料ヲ受クル者官ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ但其俸給ハ退職現時ノ俸給ヨリ少額ナラス且年齡未タ六十歳ニ至ラサル場合

ニ限ル

五 府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ

退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ヲ受クルコトヲ得ス

一 公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第八條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第九條 府縣立師範學校及公立中學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第四條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ俸給四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第十條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員在職滿一年以上五年未滿ニシテ退職シタル者ハ退職現時ノ俸給一箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル者ハ俸給二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ俸給三箇月分ニ當ル金員ヲ給ス

第三條第四條又ハ第九條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ

生シタル後三箇月内ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日府縣立師範學校及公立中學校長正教員ノ職ニ就クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退隱料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノトス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立サル者ハ本文ノ限ニ在ラス

本條ノ給與及之ニ關スル費用ハ退職者ノ退職ノ際勤務セシ學校所屬府縣郡市町村ノ負擔トス

第十一條 退隱料ノ支給ハ府縣知事ノ證明ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三 退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十三條 官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十四條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニシテ在職十五年未滿ノ者在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

第十五條 扶助料及扶助金ノ支給並第十三條第二項ノ給與ハ府縣知事ノ申牒ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

第十六條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ハ其俸給百分ノ一ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

府縣郡市町村ハ其府縣立師範學校及公立中學校長正教員ノ俸給百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

第十七條 退隱料扶助料扶助金及第十三條第二項ノ給與並其支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス

退隱料扶助料扶助金等ノ支給ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十八條 同一人ニシテ國庫ヨリ二種以上ノ退隱料又ハ扶助料ヲ受クヘキ者アルト

キハ本人ノ所擇ニ任セ其一ヲ給スルモノトス

第十九條 府縣立師範學校及公立中學校書記ノ退隱料等ハ府縣知事郡長市町村長ニ於テ府縣郡市町村會ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムルコトヲ得

府縣立師範學校及公立中學校並市町村立小學校ニアラサル公立學校職員ノ退隱料等ハ前項ノ例ニ依ル

本條ノ退隱料等及其支給ニ關スル費用ハ其府縣郡市町村ノ負擔トス

第二十條 此法律第一條ハ明治二十五年ヨリ第二條乃至第十九條ハ明治二十六年度ヨリ之ヲ施行ス

第二十一條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シテ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

●傷痕恩給ヲ受ケ文官ニ任シタル者恩給支給方

明治二十二年十二月  
勅令第三百三十三號

朕傷痕恩給ヲ受ケ文官ニ任シタル者恩給支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治九年十月太政官第九十九號達陸軍恩給令ニ依リ傷痕恩給ヲ受ケタル後文官ニ任シタル者其文官奉職ノ年數ニ依リ恩給ヲ增加スル場合ニ於テハ明治十六年九月太政官第

三十七號達陸軍恩給令ニ依リ前ニ受ケタル恩給金額ヲ更正スヘシ  
 前項恩給ノ増加ハ武官現役年數ト文官奉職年數トヲ通算シテ十五年以上ニ至ル者ニ  
 限ル前項ニ依リ文官恩給ヲ受ケタル者ノ遺族ニシテ明治十六年九月太政官第三十七號  
 達陸軍恩給令第二十四條第二十六條第二十九條ニ該ル者ハ武官恩給令ニ依リ扶助料  
 ヲ受クルコトヲ得

参照

○明治十六年九月太政官第三十七號達陸軍恩給令中

第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一ケ  
 年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時  
 年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痍疾病ニ原因シテ死シタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ  
 年月ニ關セス負傷又ハ發病前ニ婚配セル者ニ限ル

第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當  
 該軍人ノ孤兒嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシ  
 テ男女ニ拘ハラス(家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名ノ繼襲ノ者ニハ寡婦ト  
 等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額ノ三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ  
 母在ラサル者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十九條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再  
 嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他  
 ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終  
 身給スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消  
 絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此  
 例ニ依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年齡五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニ  
 シテ産業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ且孰レモ軍人死歿  
 ノ際年齡五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

●恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者權利消絶支給ヲ停

メタルトキ取扱方 明治二十一年七月 閣令第九號

文武官恩給令ニ依リ恩給若クハ扶助料ヲ受ケタル者權利消絶又ハ一時支給ヲ停メ  
 マルトキ其取扱方左ノ通之ヲ定ム

但明治八年四月太政官第四十八號達陸軍武官傷痍扶助死亡ノ者祭葬家族扶助概則  
 及同年八月太政官第四百十八號達海軍退隱令ニ依リ扶助料若クハ退隱料ヲ受ケマ









第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアル者ハ第六項トス

●警察及監獄雇員ニシテ職務上死傷セシ者吊祭扶助

療治料支給方 明治二十年九月 內務省訓令第四十二號

廳府 縣集治監 假留監

警察及監獄備員ニシテ職務上死傷セシモノ吊祭扶助療治料ハ十五年第六十七號公達ニ照準支給スヘシ

但警察備ハ警察費監獄備ハ獄監費ヨリ支辨スルモノトス

参照

○明治十五年第六十七號公達

一吊祭料

重傷死ニ至ル者ハ金三十拾圓ヲ給ス親族故舊ナキモノハ戶長役場ニ付シ辨宜處分セシム

一遺族扶助料

父母妻子若クハ死者ニ依リ從來生計ヲナセシモノハ金五十拾圓ヨリ少カラヌ百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一傷痍扶助料

一等傷終身不具トナリ自用ニ辨スル能ハサル者ハ金六十拾圓ヨリ少カラヌ百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二等傷終身不具トナルモ自用ニ辨シ得ル者ハ金拾圓ヨリ少カラヌ五十拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一療治料

傷痍ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

●戶長退官及死亡ノ節賜金給與方

明治十八年四月 內務省達甲第十一號

府縣 沖繩縣 府縣 沖繩縣

一戶長滿五年以上奉職十一年未滿ニシテ退官セシキハ現俸給三箇月分ヲ給シ其滿十一年以上ニシテ同上ノ者ニハ現俸給四箇月分ヲ給ス但自己ノ便宜ニ依リ退官ヲ請フ者又ハ服務紀律ニ違ヒタル者ノ諭旨退官及ヒ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官セシ者ニハ總テ之ヲ給セス

一戸長在職中死亡ノ者ハ現俸給三箇月分ヲ給ス  
右相達候事

●巡查看守給助例

明治十五年七月  
太政官達第四十一號

警視廳 府縣(東京府沖繩國箱札嶋  
根室ノ四縣ヲ除ク)

巡查看守給助例別紙ノ通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ經テ  
施行可致此旨相達候事

但實施ノ府縣ハ八年一第三號達并九年八第八拾號達別表中免職歸國旅費ハ相達候  
儀ト相心得ヘシ

(別紙)

巡查看守給助例

第一條 給助ハ退職給助、傷疾給助、死亡給助、療治料、祭祀料ノ五種トス

第二條 給助ヲ與ル者ハ左ノ如シ

- 一 退職給助 勤績巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ轉スルモ總テ勤績トス滿五年以上ニシテ退職スル者ニハ一時之  
ヲ給シ滿十年以上ニシテ退職スル者ニハ終身之ヲ給ス
- 二 傷疾給助 職務ノ爲メ負傷スル者ニ終身之ヲ給ス

三 死亡給助 職務ノ爲メ重傷死ニ至ル者及ヒ負傷後其傷疾ニ原シテ死亡スル者

又ハ職務上傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

五 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條 退職給助ノ額

一 勤績滿五年ノ者ハ一時金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

滿六年以上九年迄ハ一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

二 勤績滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

滿十一年以上ハ一年毎ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

第四條 傷疾給助ノ額

一 一等傷終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者ハ年金三拾圓ヨリ少カラス四拾圓ヨリ多カラサル額ヲ  
給ス

二 二等傷終身不具トナリ自  
用ヲ辨シ得ル者ハ年金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル  
額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤兒二十歳ニ至レハ廢止ス

- 但寡婦アレハ孤兒ニ給セス
- 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナシ祖父母父母又ハ二十歳未満ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
  - 三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 第六條 療治料ハ傷痕又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス
- 第七條 祭祀料
- 一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヨリ少カラス拾五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス
  - 二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス
- 一 公權ヲ剝奪セラレタル者
  - 二 懲罰ニヨリ免職セラレタル者

第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

- 一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者
- 二 公權ヲ停止セラレタル者
- 三 失踪シタル者
- 四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

● 巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ在職者退職ノ時慰勞金支給方

明治十五年七月  
太政官達第四十二號

警視廳 府縣(東京府神戶函館札  
札幌室四縣ヲ除ク)

巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引續キ五年未滿(俸職ノ日ニシテ退職スルトキハ給助例施行ノ日ヲ限界トシ勤績年數ニ應ジ滿年賜金ノ例ニ依リ當時ノ月俸額ヲ以テ退職ノ際一時慰勞金ヲ支給スヘシ此旨相達候事)

● 巡查看守給助例實施ノ府縣ニ於テ人員減少ニ因リ免職者ヘ一時慰勞金支給方

明治十五年十二月  
太政官達第六十六號

警視廳 府縣(東京府神戶函館札  
札幌室四縣ヲ除ク)

本年七月第四十一號ヲ以テ巡查看守給助例相違候處右實施ノ府縣ニ於テ人員減少等ニ因リ免職スルコトアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當日迄ノ勤績年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ據リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相違候事

●巡查看守給助例第二條一項勤績割註ノ趣ハ一地

方轉任スル者ニ限ル  
明治十五年十二月  
內務省達乙第六十八號

警視廳 府縣(東京府神戶西館札  
嵯峨室四縣ヲ除ク)

本年七月第四十一號公達巡查看守給助例第二條第一項勤績割註ノ趣ハ全ク一地方內轉任スル者ニ限ル義ニ付此旨爲心得相違候事

●巡查看守給助例中年金支給方  
明治二十年四月  
內務省訓令第二十三號

廳府縣 集治監假留監

巡查看守給助例中年金ハ左ノ各項ニ據リ支給スヘシ

- 一 年金ハ毎年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前六ヶ月六ヶ月ニ滿タサルモノハ現月數ヲ以テ計算ス分テ支給スヘシ
- 一 年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷痍ノ翌月ヨリ支給スヘシ

- 一 年金ヲ受ケタル者本例第八條第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支給スヘシ
- 一 年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其月分全額ヲ支給スヘシ

●一般人民ニシテ巡查同様ノ働チナシ死傷セシ者

吊祭扶助治療料支給方

明治十五年十二月  
太政官達第六十七號  
警視廳 府縣(東京府神戶西館札  
嵯峨室四縣ヲ除ク)

一般人民ニシテ巡查同様ノ働チナシ死傷セシ者吊祭扶助治療料支給方左ノ通相定候條此旨相違候事

吊祭扶助治療料

一 吊祭料

重傷死ニ至ル者ハ金三十拾圓ヲ給ス親族故舊ナキノモハ戶長役場ニ付シ便宜處分セシム

一 遺族扶助料

父母妻子若クハ死者ニ依リ從來生計ヲナセシモノハ金五十拾圓ヨリ少カラズ百圓

ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一 傷瘻扶助料

一等傷 終身不具トナリ自用ニ辨スル能ハサル者 へ金六拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二等傷 終身不具トナラズモ自用ニ辨シ得ル者 へ金拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一 療治料

傷瘻ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

● 宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例

明治二十三年八月 宮内省達第十六號

明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例明治二十二年達第二十四號宮内省准官吏恩給例ヲ廢シ宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例左ノ通相定ム

宮内省官吏恩給例

第一條 宮内省官吏判任以上ノ者退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額

二 傷瘻疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額

三 在官年數ノ計算並明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方

四 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別

五 恩給ノ停止及剝奪

六 恩給ヲ受クル資格ノ存否

第三條 宮内大臣ノ在職年數ハ國務大臣ノ例ニ依ル

第四條 政府ノ文官ヨリ宮内官ニ轉任シタル者又ハ恩給ヲ受ケスレテ政府ヲ退キタル後宮内官ニ任シタル者ハ政府ノ判任官以上ニ在リシ月數モ在官年數中ニ通算ス

第五條 准官吏 宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタル准判任以上ヲ云フ以下皆同シ ヨリ官吏トナリタル者ハ准官吏在官年數五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ通算ス

第六條 准官吏ヨリ官吏トナリタル當月ハ官吏在官年數中ニ算入ス

第七條 俸給ヲ受ケサル官吏並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮内省官制外ニ屬スル者ニハ恩給ヲ給スルコトナシ但高等官試補及判任官見習ノ傷瘻疾病ニ對スルモノハ此限ニアラス

第八條 恩給ノ支給ハ其所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ證明ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス

第九條 前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六箇月以内ニ宮内大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求ス



○明治二十三年勅令第九十八號列任以上文官退官賜金給與方ト參看スヘシ

ルコトヲ得

第十條 前條再審査ノ請求アルトキ宮内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命ジ審査ノ上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルコトヲ得ス

第十一條 恩給ハ賣却讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トナスコトヲ得ス違フ者ハ恩給ヲ停止ス

第十二條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年ヲ過クレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第十三條 明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ其恩給例ニ依ルヘシ但停止及剝奪ハ本例ニ依ル

第十四條 判任官以上ノ者在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス

宮内省准官吏恩給例 第一條 宮内省准官吏宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタル准判任以上ヲ云フ以下皆同シノ退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス  
一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合

二 傷痍疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合

三 在官年數ノ計算並明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方

四 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別

五 恩給ノ停止及剝奪

六 恩給ヲ受クル資格ノ存否

第三條 准官吏恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官ノ年數トニヨリ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額四百分ノ八十トシ滿十五年以上一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算ス

恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第四條 官吏ヨリ准官吏トナリタル者通算シテ十五年ニ滿ツルトキハ官吏在官年數ニ五分ノ一ヲ加ヘテ准官吏在官年數ニ通算シ其加算ノ年數並爾後勤績ノ年數ニハ

第三條ノ算則ヲ以テ滿一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ加算ノ年數ヲ併セ滿四十年ニ至

テ止ム

第五條 官吏滿十五年以上在官ノ後准官吏トナリタル者ハ其准官吏退官ノトキニ於テ准官吏在官年數ノ五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ併算シ官吏恩給支給ノ例ニ依ル

第六條 官吏ヨリ准官吏トナリタル當月ハ官吏在官ノ年數中ニ算入ス

第七條 宮内省官吏恩給例第四條第八條第九條第十條第十一條第十二條ハ本例ニモ適用ス

第八條 准官吏在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス

宮内省官吏准官吏遺族扶助例

第一條 宮内省官吏准官吏判任以上ノ者左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ其遺族ニ扶助料ヲ給ス但第三條ノ納金ヲ爲スヲ要セサル者ノ遺族ハ此限ニアラス

- 一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ
- 二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ
- 三 恩給ヲ受ケル者死去シタルトキ

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十四號官吏遺族扶助法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

- 一 寡婦扶助料ノ年額
- 二 扶助料ヲ支給スヘキ者及支給轉給ノ制限
- 三 扶助料ノ廢止停止
- 四 扶助料ヲ受ケヘキ資格ノ消滅
- 五 在官十五年未滿ニシテ在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタル者ノ遺族ニ給スル一時扶助金

第三條 官吏准官吏判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ内藏寮ニ納ムヘシ俸給ヲ受ケサル官吏並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮内省官制外ニ屬スル者ハ納金ヲ要セス又兼官ニ依テ受ケル加俸ニ對シテハ納金ヲ要セス

第四條 扶助料ノ支給ハ本人元所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ申牒ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス

第五條 前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六箇月以内ニ宮内大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第六條 前條再審査ノ請求アルトキ宮内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命ジ審査ノ上裁決ス  
此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルコトヲ得ス

第七條 扶助料ハ賣却讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トナスコトヲ得ス  
違フ者ハ扶助料ヲ停止ス

第八條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル日ヨリ三箇年ヲ過クレハ之ヲ請求ス  
ルコトヲ得ス

●宮内省官吏准官吏恩給例施行規則同遺族扶助例施

行規則 明治二十三年十月  
宮内省達第二十號

宮内省官吏准官吏恩給例施行規則

第一條 宮内省官吏恩給例第一條同准官吏恩給例第一條ニ掲ケタル官吏准官吏トハ  
宮中ニ奉仕スルト省務ニ從事スルトヲ問ハス宮内省ヨリ俸給ヲ給與スル者及皇族  
職員中宮内省ヨリ俸給ヲ給與スル者ヲ云フ

第二條 恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ所管長所管長ナキ者ハ内事課  
長ニ差出スヘシ但部局ノ廢合ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル部局長ニ  
差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ在官中ノ履歷書ヲ添付スヘシ

第四條 公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者及恩給ヲ受ケ又  
ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷痕疾病重症ニ赴キタ  
ルトキ恩給ヲ請求スル者ニ在テハ履歷書ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ證明スヘシ  
一 現認證書又ハ之ヲ謄スヘキ公文ノ寫若クハ口供書  
一 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受ケタル所管長若クハ内事課長ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト  
認ムルトキハ第一號第二號第三號ノ書式ニ準據シ請求者ノ在官年數及恩給年額計  
算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ調査課ニ回付スヘシ若シ請求ノ理由ナシト認ムルトキ  
ハ其意見ヲ附シテ之ヲ回付スヘシ

第六條 調査課長ハ前條所管長若クハ内事課長查覈ノ書類ニ據テ檢案シ宮内大臣ニ  
具狀ス大臣之ヲ允許シタルトキハ調査課ニ於テ恩給證書ヲ作り所管部局若クハ内  
事課ヲ經テ之ヲ本人ニ下付ス但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用フ

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ前三箇月分ヲ内藏寮ヨリ支  
給シ受領證ヲ徴ス但資格消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ハラヌ之ヲ支給

六 恩給ヲ受クル者東京市外ニ居住スルトキハ其恩給金ハ内藏寮ヨリ爲換ヲ以テ送付スヘキニ付到達ノ上ハ直ニ受領證ヲ内藏寮ニ郵送スヘシ但受給者所在地ニ爲換ヲ取組ヘキ便宜ナキトキハ其近傍ニ於テ便宜アル地迄爲換ヲ取組送付スルモノトス

第八條 恩給ヲ受クル者其居住ヲ轉シタルトキハ内藏寮ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ内藏寮ハ之ヲ調査課ニ通知スヘシ

第九條 宮内省官吏恩給例第二條第五項同准官吏恩給例同條同項ニ當ル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル
- 二 准判任官以上ニ任シ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム
- 三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラレヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十條 宮内省官吏恩給例第二條第三項同准官吏恩給例同條同項ニ掲クル明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方ハ明治四年六月東京淺草米原ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一箇月分ニ相當スル金額ヲ準據トシテ支給額ヲ定ムルモノトス

第十一條 公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リシ者ニ給スル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

- 一 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七
  - 二 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六
  - 三 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五
  - 四 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四
  - 五 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三
  - 六 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二
- 傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ヲ適用ス
- 第十二條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ調査課ニ届出恩給證書ヲ返納スヘシ又第十三條ノ場合ニ於テハ裁判宣告書ノ寫ヲ添ヘ家族ヨリ届出ヘシ
- 前項ノ場合ニ於テ調査課ハ直ニ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ
- 第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタル

トキ其確定裁判ノ宣告ヨリシコトヲ知リタルトキハ 裁判所ノ通知本人家族ヨリノ届出等ニ依ル 調査課ヨリ内藏寮ニ通知スヘシ内藏寮ハ之ニ依テ恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給スヘシ前項ノ場合ニ於テ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ其旨ヲ調査課ヨリ本人ニ通知シテ恩給證書ヲ返納セシムヘシ

第十四條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ其事由ヲ具シテ調査課ニ申出ヘシ此場合ニ於テ調査課ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り本人ニ下付スヘシ前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十五條 恩給ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ恩給證書ヲ添へ調査課ニ届出ヘシ調査課ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記シ調査課長署名捺印ノ上本人ニ下付シ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第十六條 明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

- 一 死去又ハ資格消滅又ハ停止ノトキ
  - 二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ
  - 三 改氏名又ハ居住ヲ轉シタルトキ
- 宮内省官吏准官吏遺族扶助例施行規則

第一條 宮内省官吏准官吏遺族扶助例第一條ニ掲ケタル官吏准官吏ハ宮内省ヨリ俸給若クハ恩給ヲ給スル者ヲ云フ皇族職員モ亦同シ

第二條 扶助料ヲ請求スルトキハ其請求書ニ署名シ 後見人アレハ其後見人署名スヘシ 親族二名親族ナキトキハ他ノ戸主二名連署シ其市町村長 市制町村制ヲ施行セザル地方ニ於テハ區戸長 ノ與印ヲ受ケ市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添附シ元所管長若クハ内事課長ニ差出スヘシ

第三條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ資格消滅シ若クハ支給期限ノ満チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ添へ請求書ト爲スヘシ

第四條 公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ添へ請求ノ證ト爲ヘシ

第五條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未満ノ者又ハ癱疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキ又ハ孤兒二十歳ニ滿ツルモ癱疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ其事由ヲ詳記シ癱疾不具ノ者ハ醫師ノ診斷書ヲ添へ扶助料ヲ請求スヘシ

第六條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル所管長若クハ内事課長ハ査覈ノ上第四號第五號書式ニ準據シ扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添へ調査課ニ回付スヘシ

公務ノ爲メ受ケタル傷痕ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ビ勤務ニ従事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ因リ傳染病者ニ接シ該病者ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ遺族ヨリ扶助料ヲ請求セシトキハ所管長若クハ内事課長ニ於テ其傷痕若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類ヲ併セテ調査課ニ回付スヘシ

調査課長ハ所管長若クハ内事課長查取ノ書類ニ據テ檢按シ宮内大臣ニ具狀ス大臣之ヲ允許シタルトキハ調査課ニ於テ扶助料證書ヲ作り所管部局若クハ内事課ヲ經テ之ヲ本人ニ下付ス但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用フ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ調査課ハ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第七條 遺族扶助例第三條ニ掲ケル納金ハ俸給支給ノトキ内藏寮ニ於テ之ヲ徵收ス但別ニ會計ヲ設ケル部局ハ其部局ニ於テ之ヲ徵收シ内藏寮ニ送付スヘシ

俸給ノ増減ニ依リ既納ノ金員ニ過不足ヲ生スルトキハ次回ノ俸給支給ノトキ之ヲ整理スヘシ

免官退官轉任死亡ニ依リ過渡俸給ノ返納ヲ要スルトキハ其百分ノ一ヲ納入ニ於テ差引スヘシ

第八條 扶助料ノ支給ハ宮内省官吏准官更恩給例施行規則第七條並第九條第一項第

三項ノ例ニ依ル

第九條 扶助料ヲ受クル者其居住ヲ轉シタルトキハ内藏寮ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ内藏寮ハ之ヲ調査課ニ通知スヘシ

第十條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ資格消滅シ若クハ支給期限ノ満チタルトキ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ其扶助料證書ヲ調査課ニ返納スヘシ

前項ノ場合ニ於テ調査課ハ直ニ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第十一條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ宮内省官吏准官更恩給例施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十二條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ宮内省官吏准官更恩給例施行規則第十四條第十五條ノ例ニ依ル

第一號書式

在官年數及恩給年額計算書

元官名 位勳爵 氏名

明治四年 八月 一日 七月以前ヨリ勤續官

明治四年	八月	一日	七月以前ヨリ勤續官
同何年	何月	何日	任 何 官
何年何箇月			

第七類 恩給扶助

同何年	何月	何日	何々ニ依リ退官	
同何年	何月	何日	除算スヘキ事由ナリ	除算
同何年	何月	何日	任 何 官	計何年何箇月
同何年	何月	何日	任 何 官	
同何年	何月	何日	非 職	計何年何箇月
同何年	何月	何日	何々ニ依リ退官	
從 軍 年				
同何年	何月	何日	内國 何港 出發	計何年
同何年	何月	何日	内國 何港 歸著	
同何年	何月	何日	戰地ニ臨ミ	計何年
同何年	何月	何日	戰地ヲ退ク	
通計何年退官現時俸給年額金何圓ノ二百四十分ノ若干若クハ四百分ノ若干 恩給年額金何圓 傷疾(疾病)第何項恩給最下金額ノ十分ノ若干 (恩給年額ト增加恩給年額トチ合セタル金額ノ四分ノ一) 每期給額 金何圓何拾何錢				

第七類 恩給扶助

增加恩給年額金何圓

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

明治何年何月

(取調主任)官 氏 名 印

官吏ヨリ准官吏ニ轉シ又ハ准官吏ヨリ官吏ニ轉シタル者ハ宮内省官吏恩給例第五條同准官吏恩給例第四條第五條ニ依リ加減スヘキ年數ヲ記載スヘシ第二號書式モ亦同シ  
 非職滿期退官ノ者ハ恩給年額ノ用書通計何年ノ下(退官現時)ヲ在職最終ト記スヘシ第二號書式モ亦同シ  
 シ扶助料年額計算書ヘ添付ノトキハ年數計算ノ未欄及通計何年ノ下(退官)ノ文字ヲ死去ト記シ増加恩給及每期給額等ハ記載スルニ及ハス

第二號書式(恩給ヲ受ケタル後再ヒ恩給ヲ請求シタル者ニ用ユ)

在官年數及恩給年額計算書

元官名 位勳爵 氏 名

何年何月生 明治何年何月 何年何箇月

年月日任免ノ書式ハ 第一號書式ニ依ル (此年月ハ恩給例ニ依リ通算シタ) 計何年何箇月

右退官ノ節受ケタル恩給年額金何圓 (此年月ハ恩給例ニ依リ通算シタ) 計何年何箇月

年月日任免ノ書式ハ 第一號書式ニ依ル 何年何箇月

通計何年退官現時俸給年額金何圓ノ二百四十分ノ若干若クハ四百分ノ若干

恩給年額金何圓

前ノ恩給年額ニ比較シ金何圓増

每期給額 金何圓何拾何錢

明治何年何月ノ給額金何圓何拾何錢 (初期給額)

第七類 恩給扶助

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

明治何年何月

(取調主任)官 氏 名 印

第三號書式

明治四年七月以前ニ係ル在官  
年數及恩給計算書

元官名  
位勳爵 氏 名

明治何年	何月	何日	任	何	官
同何年	何月	何日	任	何	官
同四年	七月	三十日	(任)	何	官

何年何箇月

明治四年七月現官等ノ官祿一箇月分

米何石

但明治四年六月東京淺草米屋平均相場  
一石ニ付金五圓九拾六錢六厘六毛

此金何圓何拾何錢何厘  
右代金ノ半額金何圓何拾何錢何厘ヲ在官何年ニ乘シタル額  
金何圓何拾何錢何厘

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也  
明治何年何月

(取調主任)官 氏 名 印

第四號書式

(恩給ヲ受ケタル者死去ノ後扶助料ヲ請求シタル者ニ用ユ)

扶助料年額計算書

元官名  
故位勳爵氏名(孤兒)(父母)(祖父母)  
氏 名

恩給年額金何圓ノ三分ノ二(一)

每期給額 金何圓何拾何錢

扶助料年額金何圓

明治何年何月ノ給額金何圓何拾何錢(初期給額)

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也  
明治何年何月

(取調主任)官 氏 名 印

恩給ヲ受ケヘキ資格ヲ有シテ死去シタル者ノ遺族ヨリ扶助料ヲ請求シタルトキハ此計算書ノ外第一號若クハ第二號書式ノ計算書ヲ添付スヘシ  
扶助料ノ轉給ヲ請求シタル者ニハ此計算書中恩給年額ノ一行ハ記載スルニ及ハス

第五號書式

一時扶助金計算書

故官位勳爵氏名(孤兒)(父母)(祖父母)  
氏 名

故氏名在官年數

年月日任免ノ書式ハ  
第一號書式ニ依ル

明治何年 何月 何日 死

何年何箇月

計何年何箇月

在職最終俸給年額金何圓ノ百分ノ一金何圓何拾何錢ヲ在官年數ニ乘シタル額  
金何圓何拾何錢

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也  
明治何年何月

(取調主任)官 氏 名 印

第七類 恩給扶助



●宮内省ヨリ他ノ官廳ニ轉シ若クハ他ノ官廳ヨリ宮内省ニ轉シタル官吏恩給金額定メ方  
明治二十年五月 閣令第十三號

宮内省ヨリ他ノ官廳ニ轉シ若クハ他ノ官廳ヨリ宮内省ニ轉シタル官吏ノ恩給ハ宮内省ト他ノ官廳トノ奉職年數ヲ通算シテ其金額ヲ定ムル者トス

●軍人恩給法 明治二十三年六月 法律第四十五號

朕軍人恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍人恩給法

第一章 總則

第一條 陸海軍軍人ニシテ現役ヲ離レタル者ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 陸海軍軍人恩給ハ左ノ六種トス

- 一 退職恩給
- 二 免除恩給
- 三 增加恩給
- 四 賑恤金

五 給助金  
六 扶助料

第三條 退職恩給、免除恩給、增加恩給及寡婦ノ扶助料ハ終身、孤兒ノ扶助料ハ年齢満二十歳ニ至ルマテ賑恤金、救助金ハ一時限り之ヲ給ス

第二章 退職恩給、免除恩給、增加恩給

第四條 退職恩給ハ准士官以上ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

- 一 現役十一年以上ニシテ年限ノ年齢ニ達シ又ハ年限ノ年齢ニ達セサルモ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス退職シタルトキ
  - 二 戦闘及戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ
  - 三 戰地ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ健康ニ有害ナル感動ヲ受タルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ従事シ爲メ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ
  - 四 現役十一年以上ニシテ未ダ年限ノ年齢ニ達セスト雖休職、停職満期若クハ諭旨ニ依テ退職シタルトキ
- 第五條 免除恩給ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

- 一 現役十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ定限ノ年齢ニ達セサルモ服役満期トナリ或ハ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
- 二 第四條第二又ハ第三ニ由リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
- 第六條 退職恩給、免除恩給年額ハ軍人恩給ヲ受ケヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ト其服役年數トニ從ヒ第一號表若クハ第二號表ニ依テ之ヲ給ス但現役四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十一年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十一年ノ額トス
- 第七條 軍人現役十一年以上ニシテ文官ニ任シタル者又ハ文官ヲ兼任スル者十五年未滿ニシテ退官退職スルトキハ軍人ノ服役年數ニ對スル恩給ヲ給ス其十五年以上ニシテ退官退職スルトキハ文武官ヲ比較シ恩給年額ノ多キ方ヲ給ス
- 第八條 退職恩給、免除恩給ヲ受ケタル後再ヒ現役ニ就キ滿一年以上服役シタル者退職又ハ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス
  - 一 再ヒ現役ヲ離ル、トキノ現官階當初恩給ヲ受ケタルトキノ官階ト同等ナラサルトキハ前後年數ニ再役年數ヲ通算シ再役ノ官階ニ對スル恩給ト既得ノ恩給トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

- 二 前後ノ官階同等ナルトキハ再役ノ年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前役十一年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十二年以上ニ至ラサレハ増加セズ
- 第九條 増加恩給ハ戰鬪及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ニ退職恩給、免除恩給ノ外特ニ給スルモノトス
  - 一 両眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ
  - 二 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
  - 三 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ
  - 四 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
  - 五 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ
  - 六 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
- 第十條 増加恩給ノ年額ハ軍人之ヲ受ケヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ從ヒ第三號表ニ依リ之ヲ給ス
- 第十一條 戰鬪及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケヌシテ現役ヲ離レタル後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ検査ヲ願出ルトキハ策定ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

- 一 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失フニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ二個年
- 二 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒ若クハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡スルニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ三個年
- 第十二條 傷痍疾病ニ起因シ恩給ヲ請求スル者ハ左ノ書類ニ依リ證明スヘシ
  - 一 傷痍疾病ノ原因ハ現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書
  - 二 傷痍疾病輕重ノ度ハ陸海軍醫官ノ證書若クハ陸海軍醫官ノ查覈ヲ經タル醫師ノ證書
- 第十三條 退職恩給、免除恩給、増加恩給ノ支給ハ現役ヲ離レタル日ノ翌日ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス
- 第三章 賑恤金、扶助金
- 第十四條 賑恤金ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當リ第九條第六ヨリ輕症ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ニ之ヲ給ス
  - 一 戦闘及戰地公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ
  - 二 戰時平時公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リ現役

ヲ離レタルトキ

- 第十五條 賑恤金ハ之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ應シ前條第一ニ當ル者ハ第三號表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラス前條第二ニ當ル者ハ同表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラス金額トス
- 第十六條 救助金ハ下士以上現役中死歿シ若クハ現役四年以上十一年未滿ニシテ現役ヲ離レ退職恩給、免除恩給ヲ受ケサル者ニ之ヲ給ス其額ハ第四號表ニ依ル
- 第四章 服役年
- 第十七條 服役年ノ始期終期ハ左ノ各項ニ依ル
  - 第一 退職恩給、免除恩給ニ係ル服役年ノ始期
    - 一 下士以上ハ初任ノ日陸軍兵卒ヨリ出身ノ下士以上ハ入營ノ日海軍卒ヨリ出身ノ下士以上ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第六ニ當リタルモノハ其兵卒トナリタル日
    - 二 陸軍兵卒ハ入營ノ日海軍卒ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第七ニ當リタル者ハ其刑期滿限ノ翌日
    - 三 北海道ニ移住ノ際定規ノ救助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ヨリ出身ノ士官以上ハ其士官ニ任シタル日

- 四 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
- 五 海軍下士以下ニシテ明治二年五月一日以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
- 第二 救助金ニ係ル服役年ノ始期
  - 一 下士以上初任ノ日
  - 第三 服役年ノ終期
    - 一 現役ヲ離レタルノ日
- 第十八條 左ニ掲クル日數ハ服役年ニ通算ス
  - 一 前條ニ掲クル服役年ノ始期ヨリ終期ニ至ルマテノ日數
  - 二 豫備後備ニ在ル者戰時若クハ事變ニ際シ召集シタルトキハ其召集中ノ日數
  - 三 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナリタルトキハ海軍服務ノ日數陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナリタルトキハ陸軍服務ノ日數
  - 四 文官ヨリ轉シテ陸海軍人トナリタル者ニ在テハ恩給ヲ受クヘキ最下限ノ期ニ至ルマテハ文官服務中ノ日數四分ノ三
  - 五 現役ノ者陸軍見習士官、海軍候補生若クハ陸海軍諸生徒トナリ再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

- 六 現役ヲ離レタル後再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數
- 七 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒、海軍水雷夫及北海道移住ノ際定規ノ救助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ニシテ從軍シタルトキハ其日數
- 第十九條 左ニ掲クル日數ハ服役年ヨリ除算ス
  - 一 刑期中及逃走中ノ日數
  - 二 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒中ノ日數但從軍中ノ日數ハ此限ニアラス
  - 三 文官奉職中ノ日數ニシテ官吏恩給法ニ依リ除算スヘキ月數
  - 四 年齡十七歳未滿ノ日數
- 第五章 從軍年
- 第二十條 從軍年ハ現役外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スルモノトス
- 第二十一條 從軍年ノ加算ハ左ノ各項ニ依ルヘシ
  - 一 外國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ内國港灣ヲ出發シタルトキハ二個年
  - 二 内國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ戰地ニ臨ミタルトキハ一個年
  - 三 臨戰合圍地境內ニ於テ服役シタルトキ外國ニ在テハ二個年内國ニ在テハ一個年
  - 四 日本國外ノ鎮戍ニ在リタルトキハ一個年

- 五 出征事件ニ關シ功績アル者及一時ノ出兵ヲ出征軍ト見做シ從軍年ニ加算スヘキ場合ハ勅裁ニ依ル
- 第二十二條 海軍軍人ノ外國航海ハ從軍年ニ準シ内國港灣出發ノ日ヨリ一航海ヲ半個年ニ加算ス其航海十二個月ニ超エルトキハ更ニ半個年ヲ加算ス但第二十一條ニ當ルトキハ本條ヲ適用セス
- 第二十三條 從軍年ノ加算ハ十二個月間數回ノ戰役ニ從ヒ若クハ航海ヲ爲スト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ互リ十二個月ニ餘ル所ノ分數ハ更ニ一役若クハ一航海ト爲ス
- 第六章 恩給ヲ受クヘキ資格及權利ノ消滅停止
- 第二十四條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ退職恩給、免除恩給、增加恩給、賑恤金、救助金ヲ受クヘキ資格消滅ス
  - 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
  - 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
  - 三 將校及相當官准士官ニ於テハ陸海軍刑法劊官ヲ附加スル禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒタルトキ
  - 四 將校及相當官ニ於テハ陸海軍將校分限令第二條第一項第六項ニ依リ免官トナリタルトキ

- 五 准士官以下願ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
- 六 陸海軍下士陸軍上等兵看護手樂手補ニ於テハ陸海軍刑法普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒ若クハ陸軍懲罰令若クハ憲兵條例第三十五條ニ依リ官職ヲ免セラレタルトキ
- 七 諸卒ニ於テハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ陸海軍刑法ニ依リ將校ニ對シテ劊官ヲ附加スヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 第二十五條 退職恩給、免除恩給、增加恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス
- 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間之ヲ停止ス
  - 一 再ヒ現役ニ就キ若クハ文官判任以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
  - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ
- 增加恩給ハ公權ヲ停止セラレタル場合ニアラサレハ停止セサルモノトス
- 第二十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第七章 扶助料

第二十七條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其寡婦ハ扶助料ヲ受クルノ權利アルモノトス

一 第四條第二第三ニ當リ死歿シタルトキ

二 第四條第一第四第五條第一ニ當リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クヘキ權利ヲ有シテ死歿シタルトキ

第二十八條 寡婦扶助料ノ年額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ因由トニ依リ前條第一ニ當ルトキハ第五號表ニ依リ第二ニ當ルトキハ第六號表ニ依テ之ヲ給ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其權利消滅ス

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

三 扶助料ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セサルトキ

四 死歿戸籍ヲ去リ若クハ婚嫁シタルトキ

第三十條 扶助料ヲ受クル者公權ヲ停止セラレタルトキハ其間扶助料ヲ停止ス

第三十一條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死歿シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第三十二條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ非戸主軍人ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死歿シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ及フモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第三十三條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死没シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第三十四條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死歿シタル軍人ノ戸籍内ニアル二十歳未滿又ハ痲疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一箇年分ヨリ少カラズ五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラズ一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第三十五條 第二十七條乃至第三十四條ヲ適用スヘキ軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟

姉妹ハ其軍人現役中陸海軍兵籍簿ニ登記シタル者ニ限ル

第三十六條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未ダ結婚セサルヲ云フ但養男女女子ハ家名繼承者ニ限ル

第三十七條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

雜則

第三十八條 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者退職若クハ免官スルトキハ同年七月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス海軍下士以下ニシテ明治二年五月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同年四月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第三十九條 豫備後備ニ在ル者平時召集職務ノ爲メ死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

屯田兵下士卒ニシテ定規ノ救助ヲ受クル者平時軍隊勤務ノ爲メ死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキ亦同シ

第四十條 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒定規ノ救助ヲ受クル屯田兵下士卒及海軍水雷夫ハ第四條第二第三ニ因リ死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサル者ニ限リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第四十一條 恩給ノ支給ハ陸海軍大臣ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ由リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルヲ得但シ左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷痍疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪ユルト否ラサルト

第四十二條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第四十三條 明治八年達海軍退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料及扶助料ヲ受クル者ハ總テ該令ニ依ルヘシ但明治九年達陸軍武官恩給令ニ依リ受ケタル傷痍恩給ヲ除クノ外其權利消滅及停止ハ此ノ法律ニ依ル

第七類 恩給扶助

明治七年佐賀及臺灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シタル者並ニ明治十五年同十七年朝鮮京城變亂ノ際該國ニ駐在若クハ派遣シタル者ノ從軍年計算ハ總テ從前ノ命令ニ依ル

第四十四條 此法律施行前ニ現役ヲ離レタル者ノ恩給ハ明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ月ヨリ三箇年內ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第四十五條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

第一號 退職恩給表

年數	將官及相當官					佐 尉 官 及 相 當 官					准士官
	親任官	勅任官	一 等 二 等	一 等 二 等 三 等	一 等 二 等 三 等 四 等 五 等 六 等	一 等 二 等 三 等 四 等 五 等 六 等	一 等 二 等 三 等 四 等 五 等 六 等	一 等 二 等 三 等 四 等 五 等 六 等	一 等 二 等 三 等 四 等 五 等 六 等		
十一年	千五百圓	千貳百圓	千五百圓	七百五十圓	六百圓	四百五十圓	三百圓	貳百貳拾圓	百八拾圓	百五十圓	判任官
十二年	千五百貳拾圓	千貳百貳拾圓	千五百貳拾圓	七百六十圓	六百拾圓	四百五拾圓	三百五圓	貳百貳拾圓	百八拾三圓	百五拾三圓	判任官
十三年	千五百五拾圓	千貳百五拾圓	千五百五拾圓	七百七十圓	六百拾圓	四百六拾圓	三百拾圓	貳百三拾圓	百八拾六圓	百五拾五圓	判任官
十四年	千五百七拾圓	千貳百七拾圓	千五百七拾圓	七百八十圓	六百三拾圓	四百七拾圓	三百拾圓	貳百三拾圓	百八拾九圓	百五拾八圓	判任官
十五年	千五百九拾圓	千貳百九拾圓	千五百九拾圓	八百圓	六百四拾圓	四百八拾圓	三百拾圓	貳百四拾圓	百九拾貳圓	百六拾圓	判任官

第七類 恩給扶助

十六年	千六百二拾圓	千三百圓	千六百二拾圓	八百三十圓	六百五拾圓	四百八拾圓	三百二拾圓	貳百四拾圓	百九拾五圓	百六拾三圓	判任官
十七年	千六百五拾圓	千三百五拾圓	千六百五拾圓	八百五拾圓	六百八拾圓	四百九拾圓	三百三拾圓	貳百四拾圓	百九拾八圓	百六拾五圓	判任官
十八年	千六百七拾圓	千三百七拾圓	千六百七拾圓	八百七拾圓	六百九拾圓	五百圓	三百四拾圓	貳百五拾圓	二百一圓	百六拾八圓	判任官
十九年	千七百圓	千三百八拾圓	千七百圓	八百八拾圓	七百圓	五百拾圓	三百四拾圓	貳百五拾圓	二百四圓	百七拾圓	判任官
二十年	千七百二拾圓	千三百八拾圓	千七百二拾圓	八百九拾圓	七百二拾圓	五百拾圓	三百四拾圓	貳百五拾圓	二百七圓	百七拾三圓	判任官
二十一年	千七百五拾圓	千三百八拾圓	千七百五拾圓	九百圓	七百五拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾五圓	判任官
二十二年	千七百七拾圓	千三百八拾圓	千七百七拾圓	九百二拾圓	七百七拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾八圓	判任官
二十三年	千八百圓	千三百八拾圓	千八百圓	九百四拾圓	八百圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾八圓	判任官
二十四年	千八百二拾圓	千三百八拾圓	千八百二拾圓	九百六拾圓	八百二拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾三圓	判任官
二十五年	千八百五拾圓	千三百八拾圓	千八百五拾圓	九百八拾圓	八百五拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾五圓	判任官
二十六年	千八百七拾圓	千三百八拾圓	千八百七拾圓	九百拾圓	八百七拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾八圓	判任官
二十七年	千九百圓	千三百八拾圓	千九百圓	九百二拾圓	八百九拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾三圓	判任官
二十八年	千九百二拾圓	千三百八拾圓	千九百二拾圓	九百四拾圓	九百圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾五圓	判任官
二十九年	千九百五拾圓	千三百八拾圓	千九百五拾圓	九百六拾圓	九百二拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾八圓	判任官
三十年	千九百七拾圓	千三百八拾圓	千九百七拾圓	九百八拾圓	九百四拾圓	五百拾圓	三百五拾圓	貳百六拾圓	二百七圓	百七拾三圓	判任官



第七類 恩給扶助

三十一年	二千四百	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十二年	二千二百	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十三年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十四年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十五年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十六年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十七年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十八年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
三十九年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百
四十年	二千	千六百	千四百	千	四百	六百	四百	四百	三百	二百

第二號 免除恩給表

年	官		士		卒	
	判	任	官	海軍	陸軍	海軍
十二年	六拾二圓	五拾六圓	五拾四圓	四拾八圓	四拾四圓	四拾二圓
十一年	六拾四圓	五拾八圓	五拾六圓	五拾圓	四拾六圓	四拾四圓
十年	六拾六圓	六拾圓	五拾八圓	五拾二圓	四拾八圓	四拾六圓
九年	六拾八圓	六拾二圓	五拾六圓	五拾圓	四拾六圓	四拾四圓
八年	七拾圓	六拾四圓	五拾四圓	四拾八圓	四拾四圓	四拾二圓
七年	七拾二圓	六拾六圓	五拾六圓	五拾圓	四拾六圓	四拾四圓
六年	七拾四圓	六拾八圓	五拾八圓	五拾二圓	四拾八圓	四拾六圓
五年	七拾六圓	七拾圓	五拾圓	四拾四圓	四拾圓	三拾八圓
四年	七拾八圓	七拾二圓	四拾八圓	四拾二圓	三拾六圓	三拾四圓
三年	八拾圓	七拾四圓	四拾二圓	三拾六圓	三拾二圓	三拾圓
二年	八拾二圓	七拾六圓	三拾六圓	三拾圓	二拾八圓	二拾六圓
一年	八拾四圓	七拾八圓	三拾圓	二拾四圓	二拾圓	二拾圓

第七類 恩給扶助

三十一年	六拾四圓	五拾八圓	五拾二圓	四拾七圓	四拾二圓	三拾八圓	三拾四圓	三拾圓
三十二年	六拾六圓	六拾圓	五拾四圓	四拾九圓	四拾四圓	三拾九圓	三拾五圓	三拾一圓
三十三年	六拾八圓	六拾二圓	五拾六圓	四拾一圓	四拾六圓	四拾一圓	三拾六圓	三拾二圓
三十四年	七拾圓	六拾四圓	五拾八圓	四拾三圓	四拾八圓	四拾三圓	三拾八圓	三拾三圓
三十五年	七拾二圓	六拾六圓	五拾圓	四拾五圓	四拾圓	三拾七圓	三拾三圓	三拾圓
三十六年	七拾四圓	六拾八圓	五拾二圓	四拾七圓	四拾二圓	三拾九圓	三拾五圓	三拾一圓
三十七年	七拾六圓	七拾圓	五拾四圓	四拾九圓	四拾四圓	四拾圓	三拾六圓	三拾二圓
三十八年	七拾八圓	七拾二圓	五拾六圓	四拾一圓	四拾六圓	四拾一圓	三拾六圓	三拾二圓
三十九年	八拾圓	七拾四圓	五拾八圓	四拾三圓	四拾八圓	四拾三圓	三拾八圓	三拾三圓
四十年	八拾二圓	七拾六圓	五拾圓	四拾五圓	四拾圓	三拾七圓	三拾三圓	三拾圓
三十一年	八拾四圓	七拾八圓	五拾二圓	四拾七圓	四拾二圓	三拾九圓	三拾五圓	三拾一圓
三十二年	八拾六圓	八拾圓	五拾四圓	四拾九圓	四拾四圓	四拾圓	三拾六圓	三拾二圓
三十三年	八拾八圓	八拾二圓	五拾六圓	四拾一圓	四拾六圓	四拾一圓	三拾六圓	三拾二圓
三十四年	九拾圓	八拾四圓	五拾八圓	四拾三圓	四拾八圓	四拾三圓	三拾八圓	三拾三圓
三十五年	九拾二圓	八拾六圓	五拾圓	四拾五圓	四拾圓	三拾七圓	三拾三圓	三拾圓
三十六年	九拾四圓	八拾八圓	五拾二圓	四拾七圓	四拾二圓	三拾九圓	三拾五圓	三拾一圓
三十七年	九拾六圓	九拾圓	五拾四圓	四拾九圓	四拾四圓	四拾圓	三拾六圓	三拾二圓
三十八年	九拾八圓	九拾二圓	五拾六圓	四拾一圓	四拾六圓	四拾一圓	三拾六圓	三拾二圓
三十九年	十圓	九拾四圓	五拾八圓	四拾三圓	四拾八圓	四拾三圓	三拾八圓	三拾三圓
四十年	十圓	九拾六圓	五拾圓	四拾五圓	四拾圓	三拾七圓	三拾三圓	三拾圓

第七類 恩給扶助

二十八年	百二圓	九拾二圓	八拾二圓	七拾五圓	六拾八圓	六拾一圓	五拾四圓	四拾七圓
二十九年	百五圓	九拾五圓	八拾四圓	七拾七圓	七拾圓	六拾三圓	五拾六圓	四拾九圓
三十年	百七圓	九拾七圓	八拾六圓	七拾八圓	七拾一圓	六拾四圓	五拾七圓	五拾圓
三十一年	百九圓	九拾九圓	八拾八圓	八拾圓	七拾二圓	六拾五圓	五拾八圓	五拾一圓
三十二年	百拾一圓	百一圓	九拾圓	八拾二圓	七拾四圓	六拾六圓	五拾九圓	五拾二圓
三十三年	百拾四圓	百三圓	九拾二圓	八拾四圓	七拾六圓	六拾八圓	五拾圓	五拾三圓
三十四年	百拾七圓	百五圓	九拾四圓	八拾六圓	七拾八圓	七拾圓	六拾二圓	五拾四圓
三十五年	百二拾圓	百八圓	九拾六圓	八拾八圓	八拾圓	七拾二圓	六拾四圓	五拾六圓
三十六年	百二拾二圓	百拾圓	九拾八圓	八拾九圓	八拾一圓	七拾三圓	六拾五圓	五拾七圓
三十七年	百二拾四圓	百拾二圓	百圓	九拾一圓	八拾二圓	七拾四圓	六拾六圓	五拾八圓
三十八年	百二拾六圓	百拾四圓	百二圓	九拾三圓	八拾四圓	七拾五圓	六拾七圓	五拾九圓
三十九年	百二拾九圓	百拾六圓	百四圓	九拾五圓	八拾六圓	七拾七圓	六拾八圓	六拾圓
四十年	百三拾二圓	百拾九圓	百六圓	九拾七圓	八拾八圓	七拾九圓	七拾圓	六拾一圓

第三號 負傷增加恩給表

將官及相當官 佐尉官及相當官 准士官 下 士官 卒

項目	官等親任		勅任官		奏任		官		判任		官		海軍		陸軍	
	一等	二等	一等	二等	三等	四等	五等	六等	一等	二等	三等	四等	海軍一等卒	海軍二等卒	陸軍一等卒	陸軍二等卒
一項	千五百圓	千八百圓	七百五十圓	七百五十圓	四百五十圓	四百五十圓	三百五十圓	三百五十圓	二百五十圓	二百五十圓	二百五十圓	二百五十圓	三百五十圓	三百五十圓	三百五十圓	三百五十圓
二項	九百圓	七百五十圓	六百三十圓	六百三十圓	三百六十圓	三百六十圓	二百七十圓	二百七十圓	一百八十圓	一百八十圓	一百八十圓	一百八十圓	二百七十圓	二百七十圓	二百七十圓	二百七十圓
三項	七百五十圓	六百圓	五百二十圓	五百二十圓	三百圓	三百圓	二百二十圓	二百二十圓	一百五十圓	一百五十圓	一百五十圓	一百五十圓	二百二十圓	二百二十圓	二百二十圓	二百二十圓
四項	六百圓	四百八十圓	四百二十圓	四百二十圓	二百四十圓	二百四十圓	一百八十圓	一百八十圓	一百二十圓	一百二十圓	一百二十圓	一百二十圓	一百八十圓	一百八十圓	一百八十圓	一百八十圓
五項	四百五十圓	三百六十圓	三百十五圓	三百十五圓	二百二十圓	二百二十圓	一百五十圓	一百五十圓	九十圓	九十圓	九十圓	九十圓	一百二十圓	一百二十圓	一百二十圓	一百二十圓
六項	三百圓	二百四十圓	二百十五圓	二百十五圓	九十圓	九十圓	六十圓	六十圓	四十圓	四十圓	四十圓	四十圓	六十圓	六十圓	六十圓	六十圓

第四號 救助金表

將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士官	
親任官	勅任官	奏任	官	判任	官
千五百圓	千貳百五十圓	六百圓	四百五十圓	三百圓	二百圓
千貳百圓	千貳百五十圓	六百圓	四百五十圓	三百圓	二百圓

第五號 戰闘及公務ノ爲メ死歿シタル者ノ寡婦孤兒扶助料

第七類 恩給扶助



リ本條ノ請求ヲ爲シタルトキハ地方長官ヨリ内務大臣ニ差出スヘシ

第四條 陸海軍大臣又ハ内務大臣前條ノ請求書ヲ受ケタルトキハ審査ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ恩給計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ、其傷疾疾病ニ起因スルモノニ付テハ陸軍省醫務局若クハ海軍中央衛生會議ノ覆數ヲ經タル書類、軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ノ扶助料ニ付テハ陸海軍兵籍簿ノ寫ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

陸海軍大臣又ハ内務大臣ニ於テ前項請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第五條 内閣ニ於テ恩給ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り陸軍省若クハ海軍省若クハ内務省ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第六條 軍人恩給法第三十八條ノ月俸ニシテ米給ニ係ルモノハ官吏恩給法施行規則第十一條ノ例ニ依ル

第七條 扶助料ヲ受クル者死没若クハ戶籍ヲ去リ若クハ婚嫁シ若クハ支給期限ノ満チタルトキハ地方廳ニ於テ其月ノ翌月ヨリ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通

知スヘシ大藏省ハ之ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第八條 軍人恩給法第九條第十四條第十五條ノ傷疾疾病輕重ノ等差ハ陸海軍大臣之ヲ定ム

第九條 明治八年達陸軍武官傷疾扶助死亡ノ者祭案家族扶助概則及海軍退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料扶助料ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

- 一 死没又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ
- 二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ
- 三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

第十條 明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

第十二條 本規則ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則ノ例

ニ依ル

●陸軍軍人恩給取扱手續

明治二十三年七月  
陸軍省令第二十二號

陸軍軍人恩給取扱手續左ノ通相定ム

陸軍軍人恩給取扱手續

- 第一條 軍人恩給法ニ依リ恩給ヲ請求スル手續軍人恩給法施行規則ニ示シタルモノ、外陸軍部内ニ在テハ此細則ニ準據スヘシ
- 第二條 退職恩給免除恩給増加恩給ノ請求書ハ當該軍人現役ヲ離レタル後第一第二書式ニ示シタル書類ヲ具備シ舊所屬長ニ呈スヘシ所屬長之ヲ調査シ計算書(第九書式)ヲ作り順序ヲ經テ所管長官ニ呈シ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ
- 第三條 傷痍疾病ニ基ク恩給ノ請求ニ係ルトキハ所管長官其診斷證書(第五書式)ヲ軍醫長ニ移シテ審査セシメタル上陸軍大臣ニ進達スヘシ
- 地方醫師ノ診斷證書ヲ以テ恩給ヲ請求スルハ陸軍醫官ノ診斷ヲ受クルコト能ハサル場合ニ限ル其證書ニハ原因經過療法及ヒ現症ヲ詳記シテ醫師二名署名セシムヘシ所管長官ハ醫官ヲシテ其傷痍疾病ノ等差ヲ判定シ查覈證書ヲ作ラシメタル上書類ヲ軍醫長ニ移シ之ヲ審査セシムヘシ

第四條 軍人恩給法第十一條ニ當ル者ハ其期限内ニ於テ居住地方ノ師團長若クハ屯田兵司令官ニ検査ヲ請求スルコトヲ得

師團長若クハ屯田兵司令官其請求ヲ受ケタルトキハ醫官ヲシテ其症狀ヲ實査セシメ診斷證書(第五書式)ヲ作ラシム其診斷證書ノ審査ニ係ル取扱ハ第三條ノ例ニ同

第五條 休職者停職者ノ恩給請求書ハ直ニ所管師團長若クハ屯田兵司令官<sup>兵衛ヲ寄シタル者ハ其寄留地ノ師團等</sup>ニ呈スヘシ師團長ハ之ヲ參謀長屯田兵司令官ハ參謀ニ下シテ調査セシメ計算書(第九書式)ヲ作り之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第六條 賑恤金ノ請求ハ第三書式ニ示シタル書類ヲ具備シ舊所屬長ニ呈スヘシ所屬長ハ順序ヲ經テ所管長官ニ呈シ所管長官ハ第三條ノ例ニ依リ之ヲ取扱フヘシ

第七條 給助金ノ請求ハ第四書式ニ示シタル書類ヲ具備シ本人若クハ遺族ヨリ舊所管長官ニ呈スヘシ所管長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第八條 恩給ヲ受クル權利ヲ有スル士官候補生ノ内見習士官ハ曹長ニ一等軍曹二等軍曹ノ各階級ニ進ミタル者ハ其階級ニ其他ノ生徒ハ總テ兵卒ニ準ス

第九條 服役年ヲ算スルニ當リ初任ノ月ニ端日數ヲ生シタルトキハ其月ノ大小ニ依リ積算スルヲ法トス故ニ現役ヲ離レタル月ノ端日數ト合セテ三十日以上ニ及ヒク



履歷書(第八書式)

診斷證書 地方醫師ノ製シタル診斷證書ニアリテハ醫師二名連署シタルモノ

現認證書(第七書式)若クハ公文ノ寫若クハ口供書

第三(書式用紙美濃紙)

賑恤金請求書

何年何月何日何地ニ於テ何々ノ爲メ傷痕ヲ受ケ(疾病ニ罹リ)爾來加療ノ未服役ニ堪ヘサルヲ以テ何月何日免官(免役)相成候就テハ軍人恩給法第何條ニ據リ相當ノ賑恤金下賜度證據書類相添請求仕候也

肩書第一書式ニ同シ

元官 氏 名印

所管長官爵氏名殿

附屬スヘキ證據書類

診斷證書(第五書式)若クハ第三條第二項ニ同シキ地方醫師診斷證書

現認證書(第七書式)若クハ公文ノ寫若クハ口供書

第四書式(用紙美濃紙)

給助金請求書

何年何月被任何官爾來何箇年勤績本年何月何日現役ヲ離レ候ニ付軍人恩給法第何條ニ據リ給助金下賜度證據書類相添請求仕候也

肩書第一書式ニ同シ

官 氏 名印

所管長官爵氏名殿

附屬スヘキ證據書類

履歷書(第八書式)

(遺族ヨリ出願ノトキ)

給助金請求書

第何師團何兵第何聯隊第何中隊(官廨)

故官 氏 名

右何年何月何日死去仕候ニ付軍人恩給法第何條ニ據リ給助金下賜度證據書類相添請求仕候也

故官氏名姪婦(孤兒)(遺族)

何府(縣)何市區(郡)町(村)(普通華)士(族)(平民)

何府(縣)何市區(郡)町(村)(番地寄留)

氏 名 印

所管長官官氏名殿

附屬スヘキ證據書類

履歷書(第八書式)

第五書式(用紙美濃十三行罫紙)

(一) 丙ハ朱書)

診斷證書

第何師團何兵第何聯(大)隊第何中隊

陸軍何兵何等卒氏 名

右何年(何役)何月何日何地ニ於テ何々ノ際右大腿前下部ヨリ膝關ニ貫通スル骨傷銃創ヲ受ケ(何病ニ罹リ)直ニ繃帶所(某野戰病院)ニ於テ一時ノ處置ヲ施シ爾後何々病院ヲ經テ何月何日某衛戍病院(某豫備病院)ニ入院(軍人恩給法第十一條ニ當ル者ハ爾來加療ノ未創面治癒スルニ由リ何年何月現役ヲ離レタル後何月何日來該傷痕ノ爲メ何々症ヲ發シ)當時ノ症狀何々(何々症ヲ繼(併)發ス)依テ何々ノ部ニ何々ノ手術(何々ノ療法)ヲ施シ爾後經過何々ニシテ現今創面(何々)ハ治癒スト雖モ右膝關節何度ノ角ニ於ケル強剛ヲ遺シ且患肢ハ健肢ヨリモ瘦削セルコト何々ノ部ニ於テ周測スルニ何仙迭迷篤爾ニシテ該肢ノ用ヲ妨クルニ由リ軍人恩給法第九條第何項症(賑恤金ニ係ルモノハ軍人恩給法第十四條第何項即陸軍々々人傷痕疾病

恩給等差例第二條第何款ノ甲(乙)症)ト診斷候也

主任

年月日

職 官氏 名 印

再診

何病院長 官氏 名 印

「審査」

「第何師團軍醫長 官氏 名 印」

「右覆敷候處適當ノ診斷ト認定候也」

「陸軍省醫務局長 氏 名 印」

備考 傷痕疾病ノ原因、症候(傷痕ノ種類、部位、淺深等、疾病ノ輕重、併發症、繼發症等)經過、療法及ヒ現時官能障礙ノ景況ヲ詳記スヘシ

本證書ハ退役又ハ服役免除ノ爲ニ要スル診斷證書ト同時ニ調製スヘキモノトス

再診ハ本人ニ就テ診斷スルヲ例トス但シ場合ニ依リ病床日誌ノ寫(病床日誌ヲ作ヲサルトキハ病歷書)ニ就テ再診スルコトヲ得各官衙附憲兵隊附等ノモノニ係ル審査ノ取扱ハ一般ノ手續ニ據ル



第六書式(用紙美濃十三行野紙)

死亡證書

第何師團何兵第何聯(大)隊第何中隊

陸軍何兵何等卒氏 名

右何年何月何日何地ニ於テ何々ノ際何部ニ何傷ヲ受ケ(何病ニ罹リ)爾後何病院(何々ヲ經テ)何月何日來何病院)ニ於テ加療候處(何々症ヲ繼(併)發シ)遂ニ何々ニ由リ本日午前(後)何時何分死亡候也

年 月 日

職 官 氏 名印

備考 入院患者ニアリテハ病院長其他ニアリテハ主任ノ醫官之ヲ調製スルモノ

トス

第七書式

現認證書

第何師團何兵第何聯(大)隊第何中隊

陸軍何兵何等卒氏 名

右何年何月何日午前(後)何時何地ニ於テ俱ニ進撃ノ際(器械體操何演習何々ノ際)何々ニ由リ何々ニ觸レ(何々ニ由リ何物ノ爲ニ)何部ニ何傷ヲ受ケルヲ現認候也

年 月 日

第何師團何兵第何聯(大)隊第何中隊  
官 氏 名印

同

官 氏 名印

備考 本證書ハ勉メテ受傷ノ現況ヲ詳記スヘシ

現認者一名ノ場合ニ在テハ一名ニテ之ヲ作ルヘシ

第八書式

履歷書(死者ノ遺族ヘ下付スヘキ履歷書モ之ニ準ス)

何府(縣)何市區(郡)町(村)番地(士族(平民)何番地寄留)

官 氏 名印

明治何年何月何日 徵兵ニテ何師團ヘ入營(任何官) 文官ニ係ルモノハ其任命シタル官廳ノ名ヲ任官ノ下ニ一々記入スヘシ

同 何年何月何日 何々ノ科ニ依リ輕禁錮何日

同 何年何月何日 任何兵二等軍曹

同 何年何月何日 任何兵一等軍曹

某地從軍(外國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレタルトキハ内國港灣出發ノ日)  
(内國戰ニ在テハ戰地ニ臨ミタル日)  
(陸戰合圍地境内ニ於テ服役シタルトキハ其境内ニ於テ役ニ就キタル

同 何年何月何日 某地ヨリ歸營  
(日) 日本國外ノ鎮戍ニ在リタルトキハ其鎮戍ニ臨ミタル日)

同 同年何月 任何兵曹長  
(外國戰ニ當リテハ歸港ノ日)

同 同年何月何日 任何兵少尉  
(内國戰ニ當リテハ戰地ヲ退キタル日)

同 何年何月何日 任何兵中尉  
(陸戰合圍地境内ニ於テ役ニ就キタルトキハ其役ヲ離レタル日)

同 何年何月何日 豫備(後備)(退役)被仰付(免官)(免役)(死亡)  
(日本國外ノ鎮戍ニ在リタルトキハ其鎮戍ヲ離レタル日)

第九書式

恩給計算書				官氏名
年	月	日	事由	
明治何年	何月	何日	任何官	何年何箇月(一時賜金ニ係ル年月)
同 何年	何月	何日	任何官	
同 四年	七月	三十日	官俸何箇月	

服役年通算

同 何年	何月	何日	徵兵	何年何箇月
同 何年	何月	何日	教導團生徒	除ク
同 何年	何月	何日	任何官	何年何箇月何日
同 何年	何月	何日	任何官	
同 何年	何月	何日	任何官	
同 何年	何月	何日	任何官	
同 何年	何月	何日	服役終期	何年何箇月何日 加算
同 何年	何月	何日	何役従軍	
同 何年	何月	何日	輕禁錮	何月何日
同 何年	何月	何日		差引何年何箇月何日
同 何年	何月	何日		退職(免除)恩給何年ノ高
總計何年何箇月何日				



- 八 咀嚼言語ノ兩機ヲ廢シタルモノハ第一項トシ殆ト之ヲ廢シタルモノハ第二項トス其機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項第六項トス
- 九 咀嚼若クハ言語ノ機能ヲ廢シタルモノハ第二項トシ殆ト之ヲ廢シタルモノハ第三項トス其機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項第六項トス
- 十 精神錯誤若クハ神識缺乏シテ常ニ看護ヲ必要トスルモノハ輕重ヲ酌量シテ第一項若クハ第二項トシ其看護ヲ要セサルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項トス
- 十一 半身不遂ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項第四項トス
- 十二 直腸膀胱ノ麻痺ヲ併セ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項トシ直腸若クハ膀胱ノ麻痺ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トス
- 十三 呼吸機能ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項第五項第六項トス
- 十四 胸腹内ノ臟器ニ滲管ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第二項若クハ第三項

第四項トス

- 十五 陰莖若クハ兩睪丸ヲ失シタルモノハ第二項トシ陰莖ヲ半失シタルモノハ第五項トス
- 十六 項若クハ腰ノ運動ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項第六項トス
- 十七 一肢ヲ亡シ併セテ他ノ一肢ノ用ヲ廢シタルモノハ第一項トス
- 十八 二肢ノ運用ニ妨アルモノハ輕重ヲ酌量シテ第四項若クハ第五項トシ一肢ノ運用ニ妨アルモノハ第六項トス
- 十九 一上肢ヲ亡シタルモノハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間何レノ部ヨリ亡シタルヲ論セス第三項トシ兩上肢ニアリテハ第一項トス
- 二十 一上肢ニ於テ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ一關節以上ノ運動ヲ廢シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩上肢ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス
- 二十一 一手ニ於テ拇指ヲ併セ四指以上ヲ失シタルモノハ第四項トシ兩手ニアリテハ第二項トス
- 二十二 一手ニ於テ拇指指示指ヲ併セ失シタルモノハ第五項トシ兩手ニアリテハ第

- 三項トス
- 二十三 一手ニ於テ拇指ヲ失シタルモノ若クハ示指中指ヲ併セ失シタルモノ若クハ示指中指環指ヲ併セ失シタルモノ若クハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ併セ失シタルモノハ第六項トシ兩手ニアリテハ第四項トス
- 二十四 一手ニ於テ示指中指環指小指ヲ併セ失シタルモノハ第五項トシ兩手ニアリテハ第三項トス
- 二十五 一手ニ於テ示指中指環指若クハ示指中指環指小指若クハ拇指ヲ併セ三指以上ノ癒著或ハ強剛等ヲ遺シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩手ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス
- 二十六 一手ニ於テ四指以上ノ各一部ヲ併セ失シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩手ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス
- 二十七 兩手ニ於テ拇指示指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノハ第五項トス
- 二十八 一下肢ヲ亡シタルモノハ膝關節ヨリ踝關節ニ至ル間何レノ部ヨリ亡シタルヲ論セテ第三項トシ兩下肢ニアリテハ第一項トス
- 二十九 一下肢ニ於テ膝關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ一關節以上ノ運動ヲ廢シタル

●陸軍軍人傷  
 疾疾病恩給等  
 差例中改正  
 明治二十三年十  
 二月  
 陸軍省達第二百  
 二十一號  
 明治二十三年七  
 月  
 陸軍省達第四百  
 七號  
 陸軍軍人傷疾  
 疾病恩給等差  
 例中改正  
 左ノ通改ス  
 第二條第五款  
 一、  
 二、三項中各「右」  
 「他」ノ下ニ「二」  
 「趾」ノ下ニ「五」  
 「ナ」ヲ加フ、第  
 四條第五款第  
 二項中但書ヲ削  
 除ス

- モノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩下肢ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス
  - 三十 一足ニ於テ踝關節ノ下概テ三分ノ一以上ヲ失シタルモノハ輕重ヲ酌量シテ第五項若クハ第六項トシ兩足ニアリテハ輕重ヲ酌量シテ第三項若クハ第四項トス
  - 三十一 一足ニ於テ第一趾ヲ併セ三趾以上ヲ失シタルモノハ第六項トシ兩足ニアリテハ第四項トス
- 第二條 軍人恩給法第十四條第一項第二項ニ當該スヘキ傷疾疾病ハ輕重ノ度ニ因リ五款トス其區分ハ概テ左ノ如シ
- 第一款
- 一 一耳ノ機能ヲ廢シタルモノ若クハ兩耳ノ機能ニ妨アルモノ
  - 二 偏聾九ヲ失シタルモノ
  - 三 筋ノ癒著、短縮等ノ爲メ其部ノ運用ニ大ナル妨アルモノ
  - 四 骨折傷後其部ノ運用ニ大ナル妨アルモノ
  - 五 一手ニ於テ拇指示指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ
  - 六 前各症ノ他恩給法第九條第六項ニ比準シテ其症輕キモノ

第二款

- 一 肘若クハ腕關節ノ運動ニ妨アルモノ
- 二 拇指ノ末節ヲ失シタルモノ
- 三 示指ニ環指若クハ小指ヲ併セ失シタルモノ
- 四 示指ヲ除キ他ノ一指ト拇指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ
- 五 第一趾ニ他ノ一趾ヲ併セ失シタルモノ
- 六 前各症ノ他第一款ニ比準シテ其症輕キモノ

第三款

- 一 耳殼ヲ失シタルモノ若クハ頭部ニ著大ナル醜形ヲ遺シタルモノ
- 二 示指ヲ失シタルモノ
- 三 拇指示指ヲ除キ他ノ二指ヲ失シタルモノ
- 四 拇指ノ用ヲ廢シタルモノ
- 五 示指中指ノ用ヲ併セテ廢シタルモノ
- 六 前各症ノ他第二款ニ比準シテ其症輕キモノ

第四款

- 一 一眼ノ視力ニ妨アルモノ

二 拇指示指ヲ除キ他ノ三指ノ用ヲ廢シタルモノ

三 第一趾ヲ失シタルモノ

四 第一趾ヲ除キ他ノ四趾ヲ失シタルモノ

五 第一趾ヲ併セ三趾以上ノ用ヲ廢シタルモノ

六 前各症ノ他第三款ニ比準シテ其症輕キモノ

第五款

一 右中指ヲ失シタルモノ

二 拇指示指ヲ除キ右二指ノ用ヲ廢シタルモノ

三 右示指若クハ右中指ノ用ヲ廢シタルモノ

四 第一趾ヲ除キ他ノ三趾ヲ失シタルモノ

五 前各症ノ他第四款ニ比準シテ其症輕キモノ

以上ノ各款ハ共ニ輕重ヲ酌量シテ甲症若クハ乙症トス

第三條 第二條第二款乃至第五款ノ諸症中四肢ニ於テハ一上肢若クハ一下肢ニ就テ

示スト雖モ兩肢ニ同様ノ障礙アルトキハ各一款ヲ上ホスヘキモノトス

第二條中ノ各款共ニ輕重ヲ酌量シテ甲症若クハ乙症トナスハ概テ左ノ例ニ據ル

一 合併症ノ有無例之單ニ拇指ノ末節ヲ失シタルモノハ第二款ノ乙症トシ骨指骨關節ノ強剛ヲ合併スルトキハ同款ノ甲症トナスノ類

一 上肢ノ障碍ニアリテハ左右ノ區別例之左示指ヲ失シタルモノハ第三款ノ乙症トシ右示指ヲ失シタルモノハ同款ノ甲症トナスノ類

第四條 第一條ノ各症ハ總テ軍人ノ服役ニ堪ヘサルモノトス

第二條ノ各症ハ下士以下ノ服役ニ堪ヘサルモノトス但同條各症ニ比準シ其症輕キモノニシテ現時勤務ニ堪ヘサルモノハ現役ヲ免除ス

●恩給ヲ受クヘキ資格アル下士卒死歿若クハ現役ヲ離レシトキハ兵籍寫ヲ陸軍省ヘ送致セシム

明治二十三年十月  
陸軍省達第九十四號

恩給ヲ受クヘキ資格アル下士卒ニシテ死歿若クハ現役ヲ離レタル下士卒キハ其兵籍ノ寫ヲ陸軍省ヘ送致スヘシ

●軍人恩給法ニ據リ恩給出願書式

明治二十三年七月  
海軍省達第二百六十七號

軍人恩給法ニ據リ恩給出願ニ要スル書式別紙ノ通心得ヘン  
(別紙)

第一式

服役停年及傷疾疾病ニ基ク退職及免除恩給請求書  
但ニ通差出スヘシ(以下之ニ同シ)

(用紙美濃紙)

恩給請求書

某 儀

何年何月何日(被任何官)(何々被申付)爾來服役仕候處何年何月何日何々ニ依リ(豫備)(後備)(退役)服役滿期ニ付(免官)(免役)被申付(負傷)(疾病)ノ故ヲ以テ(豫備)(後備)(免官)(免役)被申付候ニ就テハ相當ノ恩給下賜度別紙履歷明細書ニ通竝ニ證據書類相添此段請求候也

元(軍艦何々)(某團何々)(休職)  
何府市區 何町何番地 華族(平民)  
何縣何郡 何町何番地 寄留  
何府市區 何町何番地 寄留

官(職)位勳爵 氏 名(印)

海軍大臣爵氏名殿  
卒ハ舊所管長官ニ宛ツヘシ(以下之ニ同シ)

年月日

付屬スヘキ書類

履歷明細書 (第八式)

傷疾疾病ニ係ルモノハ

履歷明細書 (第八式)

第七類 恩給扶助

第七類 恩給扶助

現認證書 (第五式)

負傷證書 (第六式)

診斷證書 (第七式)

疾病要略

第二式 傷疾疾病重症ニ赴キ恩給ノ増加ヲ請  
求シ若クハ其恩給ヲ更ニ請求ノトキ

恩給請求書

(用紙美濃紙)

某 儀

何年何月何日ヨリ(傷疾)(疾病)ノ故ヲ以テ(恩給及負傷増加恩給下賜候(現役ヲ離レ候)處爾來何々ニ依  
リ遂ニ重症ニ變シ別紙診斷書ノ通(傷疾)(疾病)増進仕候就テハ御検査ノ上相當ノ恩給下賜度證據書類相  
添此段請求候也

用書第一式ニ同シ

官(職)位勳爵 氏

名印

海軍大臣爵氏名殿

年月日

付屬スヘキ證據書類

診斷證書 (第七式) 地方醫師ノ製シタル診斷證書ニ  
アリテハ二名連署シタルモノ

更ニ恩給ヲ請求ノモノハ

履歷明細書 (第八式)

診斷證書 (第七式)

第三式

賑恤金請求書

(用紙美濃紙)

某 儀

何年何月何日何處ニ於テ何々ノ爲メ(傷疾ヲ受ケ)(疾病ニ罹リ)爾來加療ノ未服役ニ堪ヘサルヲ以テ何月  
何日(免官)(免役)相成候就テハ相當ノ賑恤金下賜度證據書類相添此段請求候也

用書第一式ニ同シ

官(職)位勳爵 氏

名印

海軍大臣爵氏名殿

年月日

付屬スヘキ書類

履歷明細書 (第八式)

現認證書 (第五式)

診斷證書 (第七式)

第四式

給助金請求書

(用紙美濃紙)

第七類 恩給扶助



第七類 恩給扶助

110

何年何月何日被任何官爾來何箇年勤續本年何月何日現役ヲ離レ候ニ付相當ノ給助金下賜度履歷明細書ニ  
通相添此段請求候也

某 儀

用書第一式ニ同シ

年月日

官位勳爵 氏 名

海軍大臣爵氏名殿

遺族ヨリ請求ノトキ

給助金請求書

故官位勳爵 氏 名

右何年何月何日死去仕候ニ付相當ノ給助金下賜度履歷明細書ニ通相添此段請求候也

用書第一式ニ同シ

故官位勳爵氏名寡婦(孤兒)

年月日

氏 名

海軍大臣爵氏名殿

第五式

(用紙美濃十三行罫紙)

現認證書

軍艦何乗組(其他) 勤務

右何年何月何日午前(後)何時何處ニ於テ俱ニ砲撃ノ際(何々演習ノ際何々ニ由リ何々ニ觸レ)(何々ニ由  
リ何物ノ爲メニ)何部ニ何傷ヲ受ケルヲ現認候也

海軍何官 氏 名

軍艦何分隊長若クハ何々長

年月日

官(職) 氏 名  
官(職) 氏 名

現認者一名ノ場合ニ在テハ一名ニテ之ヲ作ルヘシ

第六式

(用紙美濃十三行罫紙)

罹病 證書  
負傷 證書

軍艦何乗組(其他) 勤務

海軍何官 氏 名

右者何年何月何日午前(後)何時何處ニ於テ何ノ際何ニ由リ何ノ部ニ何ノ傷疾(大小淺深方向)ヲ負ヒ(何ノ疾病ニ罹  
リ)候ニ付即時適應ノ療法差加ヘ置キ候此段致證明候也

年 齡

第七類 恩給扶助

111

第七類 恩給扶助

年月日

勤場軍醫官 何 某印

第七式

(用紙美濃十三行野紙)

診斷證書

軍艦何乘組(其他) 勤場

海軍官 氏 名

年 齡

右者何年何月何日何處ニ於テ何ノ際何ノ爲メ何ノ部ニ何ノ傷痕ヲ負ヒ(何ノ疾病ニ罹リ)何年何月何日ヨリ施療(或ハ入院施療)ノ處何年何月何日何ノ手術ヲ行ヒ(或ハ何ノ療法ヲ施シ)何年何月何日患所(或ハ本病)全癒スト雖モ何ノ部位ヲ失ヒ(或ハ全ク或ハ半ハ又ハ少シク何部ノ運營ヲ失ヒ)現役或ハ永久服役ニ堪ヘ難キ者ト診斷致候也

年 月 日

臨監 何々衛生會議議長 何 某印

勤場 軍醫 職官 何 某印

第八式

(用紙美濃紙)

履歷明細書

明治何年	何月何日	海軍何等兵(夫)申付(任何官)(任何官職何官)(任命)文官ニ係ルモノハ其任命シタル官牌ヲ任官ノ下ニ一々記入スヘシ
同	同	何々ノ科海軍刑法第何條ニ依リ輕禁錮何日
同	同	任海軍三等兵曹
同	同	北米國へ航海但軍艦何乘組
同	同	某地從軍
同	同	某地ヨリ歸著
同	同	任海軍上等兵曹
同	同	任海軍少尉
同	同	任海軍中尉
同	同	(豫備)(後備)(退役)(被仰付)(豫備役ニ編入)(免官)(免役)現役ヲ離ル

何府何市郡何町何番地士族(平民)  
 何縣何市郡何町何番地寄留  
 軍艦何乘組(其他) 勤場  
 官(職) 氏 名  
 何年何月何日生

第七類 恩給扶助

右之通相違無之候也  
年月日

官(職位勲爵)氏 名(印)

●軍人恩給法施行規則ニ依リ死没者ノ履歴ヲ遺族ヘ下

附スルトキ添書雛形 明治二十三年十二月  
海軍省達第四百十四號

明治二十三年七月閣令第五號軍人恩給法施行規則第二條ニ依リ死没者ノ履歴ヲ遺族ヘ下付スルトキハ左ノ雛形ニ依リ添書スルモノトス

雛形用紙半葉野紙

故(官)(職)(位)(勲)(爵)氏名

遺族

右(氏名)在官中ノ履歴下付候也

年月日

海軍大臣 爵氏

海軍大臣 爵氏 名(海軍大臣印)

(下士以下ニ在ツテハ所轄艦(守府司令長官記名捺印ス)

●官吏遺族扶助法及軍人恩給法施行規則ニ據リ履歴書

下附方 明治二十三年七月  
海軍省達第二百五十九號

●退職及退職恩給ノ願書進達方ノ訓令中改正 明治二十三年一月  
海軍省達第十三號

官吏遺族扶助法施行規則第一條及軍人恩給法施行規則第二條ニ依リ死者ノ履歴書ヲ其遺族ニ下付スルハ其履歴書主管ノ應ニ於テ取計フヘシ

●退職及其恩給ノ願書進達方 明治二十一年三月  
海軍省訓令第三十一號

退職及退職恩給ノ願書ハ自今本人ノ年齢滿限或ハ留任滿期ノ當日ヲ以テ進達候様取計フヘシ

●海軍志願兵家族扶助金支給規則 明治二十二年六月  
海軍省令第三號

海軍志願兵家族扶助金支給規則左ノ通定ム

海軍志願兵家族扶助金支給規則

第一條 家族扶助金ハ志願兵ノ家族(附籍ハアル者ニ限り入營ノ日ヨリ現役ヲ離レタル日マテ支給ス)

第二條 一日金五錢七厘ヲ給スル者ニ再服役ヲ許シタルトキハ再服役ノ日ヨリ一日

金二錢七厘ヲ支給ス

第三條 家族扶助金ハ毎月末日日本人所轄艦(所轄艦トハ艦船團其他下士卒ヲ直轄スル艦ヲ云フ以下之ニ同シ)ニ於テ支給シ其日休暇ニ當ルトキハ前日ニ繰上ケ支給スヘシ

●海軍志願兵家族扶助金支給規則中改正

海軍省達第二百三十四號  
明治二十一年(三月)海軍省訓令第三十一號中一週日以前ニテテ改ム



給規則第九條  
第十條刪除  
明治二十三年四月  
海軍省令第七號  
明治二十二年六月  
月省令第三號  
軍志願兵家族扶助  
金支給規則第九條  
及第十條ヲ削除ス

第十七條 前條ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年十月一日ヨリ志願兵徵募規則ニ依  
リ一日金五錢七厘ヲ支給ス

●海軍軍人傷痍疾病恩給等差例

明治二十三年七月  
海軍省達第二百六十四號

海軍軍人傷痍疾病恩給等差例ハ明治二十三年七月陸軍省達第四百四十二號ト同一ナル  
ヲ以テ之ヲ略ス

○第八類

○任免

●文官試験試補及見習規則

明治二十年七月  
勅令第三十七號

朕文官試験試補及見習規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試験試補及見習規則

第一 通則

第一條 本令ニ於テ文官ト稱スルハ奏任判任ノ文官ヲ總稱シ試補ト稱スルハ勅令  
第十三號學位令ニ依リ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケ又ハ法科大學文科大學及舊  
東京大學法學部文學部ヲ卒業シ又ハ高等試験ヲ經當選シテ高等官ノ實務ヲ練習ス  
ル者ヲ云ヒ見習トハ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大  
學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ヲ經  
當選シテ判任官ノ事務ヲ練習スル者ヲ云フ

本令ニ於テ司法官ト稱スルハ裁判官及檢察官ヲ總稱ス

第二條 第三條第四條ニ掲グルモノヲ除クノ外本令ニ依リ定規ノ試験ヲ經當選シテ

ル者ニアラサレハ試補及見習ニ任命スルコトヲ得ス又實務練習ヲ終リタル者ニアラサレハ本官ニ任スルコトヲ得ス

第三條 三年以上分科大學ノ教授ニ任シタル者ハ高等試験及實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任シ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ハ高等試験ヲ要セス試補ニ任スルコトヲ得

司法官タルノ資格ヲ有スル者ニシテ他官ヨリ司法官ニ轉スルトキ又ハ司法官タルノ資格ヲ有シ三年以上代言人タル者ハ實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第四條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受ケル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス判任官見習ヲ命スルコトヲ得

第五條 試験ヲ分テ高等試験普通試験ノ二種トス  
高等試験ハ試補ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニシ普通試験ハ判任官見習ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニス

第六條 試験ハ筆記口述ノ二様トス筆記試験ニ落第シタル者ハ口述試験ヲ受ケルコトヲ得ス

第七條 試験ハ筆記口述ノ二様ニ就キ各科目ノ點數ヲ合算シタル一定ノ平均點數ヲ以テ合格ヲ定メ時々官廳ノ需要ニ應ジ人員ヲ限リ内閣ニ於テ合格者中ヨリ選抜シテ當選者ヲ定ム但一科目ニ付一モ點數ナキ者ハ合格者トスルコトヲ得ス

第八條 前條ノ選抜ニ當ラサル者ハ合格者ト雖モ再ヒ文官ノ任用ヲ望ムトキハ更ニ本令ニ依リ試験ヲ受ケヘシ

第九條 試験ニ必要ノ参考書類及紙墨ハ試験室ニ備ヘ置キ受験人之ヲ携帯スルコトヲ許サス

第十條 試験當選者ノ姓名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十一條 第九條ヲ犯シ若シハ不正ノ方法ヲ以テ當選シ他日其事ノ發覺シタルトキハ當選ノ効ナキモノトス

第十二條 第九條ヲ犯シタル者及第十一條ノ處分ヲ受ケ又ハ不正ノ方法ヲ以テ當選セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受ケルコトヲ得ス

第十三條 第十八條第二十三條第三十三條第三十六條ノ履歷書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受ケルコトヲ得ス

第十四條 試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 本令施行ノ後五箇年間ハ事務練習中ト雖モ本官ノ缺アルトキハ其練習ノ



- 一 出願者ノ履歷書
- 一 學位又ハ卒業證書ノ寫
- 一 身分年齡
- 第二十四條 行政官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ地方官廳一箇年半ハ中央官廳ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ
- 第二十五條 司法官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ治安裁判所一箇年半ハ始審裁判所ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ
- 第二十六條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習スルニ付テハ其主務長官ノ指揮監督ヲ受クヘシ
- 第二十七條 主務長官ハ事務練習ノ終ニ於テ試補練習ノ功程ヲ所屬大臣ニ具狀シ其意見ヲ提出スヘシ
- 第二十八條 所屬大臣ハ練習期限中ト雖モ試補官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタルモノト認ムルトキハ試補ヲ免除スヘシ
- 第二十九條 在職ノ判任官ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス缺員アル場合ニ於テハ直ニ本官ニ任スルコトヲ得
- 第三十條 試補ノ命ヲ承ケ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習セサル者ハ試

補ヲ免スヘシ

第四 普通試験

- 第三十一條 中央官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官廳ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々其官廳ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公告ス
- 第三十二條 地方官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官廳ノ需ニ應シ府縣ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々普通試験委員長ヨリ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告ス
- 第三十三條 試験願書ハ本人自ラ之ヲ認メ其時々公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ普通試験委員長ニ差出スヘシ
  - 一 出願者ノ履歷書
  - 一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書
- 第三十四條 普通試験ノ科目ハ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ普通試験委員之ヲ選定シ文官試験局長官ノ認可ヲ經テ試験ノ期日一箇月前ニ官報又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ
- 第五 判任官見習
- 第三十五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立





- 二 訴訟法
  - 三 刑法
  - 四 治罪法
  - 五 商法
  - 六 憲法
  - 七 行政
  - 八 財政
  - 九 理財
  - 十 國際法
- 第二條 前條ノ科目中本邦ニ成典アルモノヲ除クノ外ハ受験人ハ豫メ文官試験局長官ノ許可ヲ得タル外國ノ書籍ニ依リ試験ヲ受クルコトヲ得
- 第三條 高等試験ハ國語及漢字交リノ文ヲ以テ之ヲ行フ特ニ外國語及外國文ヲ以テ試験ヲ受ケンコトヲ願フ者ハ豫メ文官試験局長官ノ許可ヲ受クヘシ
- 第四條 勅令第三十七號文官試験試験補及見習規則第三條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技藝ヲ要スル者ノ試験ヲ爲ストキハ其試験ノ科目ハ試験ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前ニ文官試験局長官官報ヲ以テ之ヲ公告ス

- 第五條 高等試験ハ勅委任官ニシテ文官試験局長官ノ許可ヲ得タル者ノ外傍聽ヲ許サズ
- 第六條 筆記試験ハ受験人總員ヲ一室又ハ數室内ニ閉鎖シ一室毎ニ試験委員一名監視シテ之ヲ行フヘシ但受験人一名ナルトキハ試験委員二名監視スルヲ要ス
- 第七條 筆記試験ノ問題ハ試験局長官定ムル所ノ方法ニ依リ各受験人ヲシテ之ヲ知悉セシメ豫定ノ時間内ニ答辯書ヲ差出サシムヘシ
- 第八條 筆記試験ノ問題ノ數ハ各科目ニ付試験委員ノ議定シタル所ニ依ル
- 第九條 試験室ニ備ヘ置クヘキ必要ノ參考書類ハ法律類集官報其他公然ノ法章ニ限ル
- 第十條 口述試験ハ筆記試験ヲ終リタル後試験委員長ノ上席ヲ以テ試験委員總員ノ列席ニ於テ受験人一名毎ニ試問シテ即時答辯ヲ爲サシムヘシ
- 第十一條 口述試験ハ各受験人ニ付半時間以上一時間以内トス
- 第十二條 高等試験ハ受験人ノ果シテ學理上ノ原則ニ通曉スルヤ現行ノ法律命令ヲ解得スルヤ又法律命令ヲ實務ニ應用シ及之ヲ口述スルニ確實敏捷ナルヤ否ヤヲ試験スルヲ以テ目的トスヘシ
- 第十三條 高等試験ヲ經タル各科目ノ點數及其全體ノ効果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ

試驗委員ノ議定シタル平均點數ニ依ル

第十四條 當選者ハ各合格者ニ就キ試驗委員長ノ具狀スル所ニ依リ各官廳ノ需要ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ之ヲ定ム

第十五條 前條ノ合格者中ヨリ當選者ヲ查定スルハ其試驗ヲ行ヒタル日ヨリ四週間以内ニ之ヲ結了シ官報ヲ以テ其姓名ヲ公告スヘシ

第十六條 試驗委員長ハ試驗委員ノ職務ニ屬スル議決ノ數ニ入ラス若シ其議決ニ關シ試驗委員ノ説可否相半スルトキハ試驗委員長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 受験人ハ其試驗ヲ受クルノ際試験手續ニ關スル規則及試験委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ監視ノ試験委員ニ於テ退室ヲ命シタル後之ヲ試験委員長ニ報告シ其試験ヲ拒ムコトヲ得

第十八條 高等試験ノ手續ニ關スル細目ハ文官試験局長官ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 普通試験ニ關スル細則ハ文官試験局長官ノ認可ヲ經各官廳ノ普通試験委員ノ定ムル所ニ依ル

●高等試験手續

明治二十一年一月四日官報

高等試験手續左ノ通相定

高等試験手續

第一條 文官試験試補及見習規則第十八條ノ試験願書ハ書式ニ從ヒ試験期日二十日前迄ニ差出スヘシ其履歷書ニハ生年月住所ノ移動學事及職業ノ經歷賞罰身代限ノ有無等ヲ詳記シ品行ニ關スル證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第二條 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ三年以上其學科ヲ修メタル旨ヲ證明スル書類ヲ有スル者ハ内國若クハ外國ニ於テ修メタル大學豫備ノ學科又ハ其他特ニ修メタル學科アルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第三條 高等中學校及高等商業學校(舊東京商業學校)ノ卒業證書ヲ有スル者別ニ法律政治又ハ理財ノ學科ヲ修メタルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第四條 五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者法律政治又ハ理財ノ學科及之ニ要スル豫備ノ學科ヲ修メタルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第五條 兵役ニ關スル區長ノ證書ハ免役及猶豫ヲ證明シタル者タルヘシ

第六條 試験出願者文官試験局ニ於テ定メタル日時ニ出席セサルトキハ當期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス

- 第七條 受験人多クシテ同日ニ試験ヲ施行スル能ハサルトキハ試験委員ニ於テ試験期日ヲ異ニスルコトヲ得ヘシ
- 第八條 高等試験ノ科目ハ文官試験局長官各官廳ノ須要ニ從ヒ所定ノ科目中ヨリ之ヲ定メテ公告スルモノトス
- 第九條 試験委員ハ受持試験ノ三日前ニ筆記試験問題ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第十條 試験ハ午前九時ニ始リ正午ニ終ル試験室ハ九時十分前ニ開キ九時ニ閉ツルモノトス但口述試験ハ午後ニ亘ルコトアルヘシ
- 第十一條 文官試験局ハ受験人名簿ヲ調製シ各受験人ノ番號ヲ定メテ記入シ之ヲ受験人ニ通知スルモノトス
- 第十二條 試験委員ハ筆記試験ノ終リタル後二週間以内ニ答辯書ヲ添ヘテ試験成績ノ報告ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第十三條 試験委員ハ口述試験ヲ終リタル後三日以内ニ試験成績ノ報告ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第十四條 各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ滿點トシ各科目ノ點數ヲ通計シ得ル所ノ和ヲ科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ平均點數トス平均點數ハ六十點ヲ以テ最下限トス但一科目ノ點數五十二達セサル者ハ合格者トスルコトヲ得ス

- 第十五條 高等試験ハ通常毎年十月ニ於テ之ヲ施行スルモノトス
- 第十六條 受験人ハ試験時間中退室スルコトヲ得ス退室シタルトキハ當期ノ試験ヲ受クルヲ得サルモノトス
- 第十七條 受験人ハ室内ニ在リテ靜肅ヲ旨トシ舉措進退總テ試験委員ノ指揮ニ遵フヘシ
- 第十八條 受験人ハ試験問題ニ就キ試験委員ニ質問スルコトヲ得ス
- 第十九條 受験人ハ午前八時三十分マテニ受験人控所ニ參集シ當日ノ試験ヲ了リタル後ハ直ニ退出スヘシ
- 第二十條 答辯書ハ其主意ヲ明瞭ニ記載シ文字ハ楷書若クハ行書ニテ分明ニ記スヘシ
- 第二十一條 受験人ハ試験答辯書ニ豫定ノ番號ヲ記スヘシ其姓名ヲ掲グルコトヲ得ス
- 第二十二條 受験人ハ書類ヲ携帯シテ室内ニ入ルコトヲ得ス  
(書式略之)

●高等試験及實務練習ヲ要セス司法官ニ任シ得ヘキ